

石鎚權現遺跡群発掘調査報告 — C 地 点 —

— 県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査 —

1 9 8 5

広島県立埋蔵文化財センター

石城柵現遺跡群発掘調査報告—C地点—
 —県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—
 正誤表

頁	行	誤	正
圖版目次	左5	S B (22~24)	(S B 22~24)
5	14	何らかの祭口に	何らかの祭祀に
17	7~8	外口表無文	外表無文
21	23	ヘラミガキ	ヘラミガキ
40	24	祭口遺構	祭祀遺構
47	15	進んだ	進んだ
47	17	消化されたた	消化された
52	37	中國縱貫自動車建設	中国縱貫自動車道建設

例　　言

1. 本書は県営農地開発事業に伴い発掘調査を実施した福山市駅家町大橋に所在する石鎚椎現遺跡群C地点の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会が得た昭和59年度の国庫補助金をもって広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は伊藤実、片山和哉が、出土遺物の整理、実測等は伊藤が担当し、遺物の写真は植田千佳聰、伊藤が撮影した。
4. 本書の執筆、編集は伊藤が担当した。
5. 本書に使用した第1図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図（井原）を使用した。
6. 本書で使用した遺構表示記号はSB：住居跡、SK：土壙、SX：土器窯他不明遺構とした。
7. 本調査の理解を深めるために、『石鎚椎現第2号古墳発掘調査報告』広島県立埋蔵文化財センター（1984年）及び本書と同時に刊行される『石鎚椎現遺跡群、西ヶ峰遺跡発掘調査報告』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（1985年）を併読されたい。

目　　次

Iはじめ	(1)
II位置と歴史的環境	(2)
III調査の概要	(4)
IV遺構と遺物	(6)
1. 弥生時代の遺構	(6)
2. 弥生時代の遺物	(13)
3. その他の遺構と遺物	(39)
Vまとめ	(42)
1. 石鎚椎現遺跡群の構成とC地点の意義	(42)
2. 出出土器の総年について	(48)

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版 1 | a 調査前近景（南東より）
b 完掘後遠景（東より） | 図版11 | a 37号土器窓（S X37）（東より）
b 38号土器窓（S X38）（東より） |
| 図版 2 | a 完掘後全景（南東より）
b 完掘後全景（北より） | 図版12 | a 30号不明遺構（S X30）遺物出土状態
（東より） |
| 図版 3 | a 22号建物跡、23・24号住居跡 S B(22~24)
（北より）
b 23号住居跡（S B23）（北より） | 図版13 | 出土土器（1） |
| 図版 4 | a 23号住居跡（S B23）内鉄器出土状態
（東より）
b 23号住居跡（S B23）内南北土層断面
（東より） | 図版14 | 出土土器（2） |
| 図版 5 | a 22号建物跡（S B22）（北より）
b 22号建物跡（S B22）土器出土状態
（南より） | 図版15 | 出土土器（3） |
| 図版 6 | a 25号住居跡（S B25）（南東より）
b 25号住居跡（S B25）上層土器群及び
床面の台石（南東より） | 図版16 | 出土土器（4） |
| 図版 7 | a 27a~c号建物跡、28・32号住居跡
(SB27a~c28-32)29・33号土壙(SK29-33)
（南東より）
b 27a・b号建物跡（S B27 a, b）（北より） | 図版17 | 出土土器（5） |
| 図版 8 | a 27a号建物跡（S B27 a）（西より）
b 27b号建物跡（S B27 b）（西より） | 図版18 | 出土土器（6） |
| 図版 9 | a 28号住居跡（S B28）（北より）
b 28号住居跡（S B28）東西土層断面
（南より） | 図版19 | 出土土器（7） |
| 図版10 | a 32号住居跡（S B32）ピット7（P 7）
内遺物出土状態（南より）
b 36号土壙（SK36）遺物出土状態
（東より） | 図版20 | 出土石器・土製品 |
| | | 図版21 | a 出土弥生時代鉄器
b 出土平安時代以降の鉄器 |

挿 図 目 次

第1図	周辺道路分布図 (1 : 50,000 井原)	(2)
第2図	周辺地形図 (1 : 2,000)	(4)
第3図	遺構配置図 (1 : 300)	(折込)
第4図	22号建物跡、23・24号住居跡 (SB22~24) 実測図 (1 : 60)	(折込)
第5図	25号住居跡 (SB25) 実測図 (1 : 60)	(7)
第6図	26号土壤 (SB26) 実測図 (1 : 30)	(8)
第7図	27a~c号建物跡、28・32号住居跡、29号土壤 (SB27a~c・28・32, SK29) 実測図 (1 : 60)	(9)
第8図	33号土壤 (SK33) 実測図 (1 : 30)	(10)
第9図	36号土壤 (SK36) 実測図 (1 : 30)	(11)
第10図	37号土器窪 (SX37) 実測図 (1 : 20)	(12)
第11図	38号土器窪 (SX38) 実測図 (1 : 20)	(12)
第12図	22号建物跡、23・24号住居跡 (SB22~24) 出土土器実測図 (1 : 3)	(24)
第13図	25・26号住居跡、27b号建物跡 (SB25・28・27b) 出土土器実測図 (1 : 3)(1 : 4)	(25)
第14図	32号住居跡、33・36号土壤 (SB32, SK33・36) 出土土器実測図 (1 : 3)	(26)
第15図	37号土器窪 (SX37) 出土土器実測図 (1 : 3)	(27)
第16図	38号土器窪 (SX38) 出土土器実測図 (1 : 3)	(28)
第17図	C-2・3区土器群出土土器実測図 (1 : 3)	(29)
第18図	C-3, D-5区土器群出土土器実測図 (1 : 3)	(30)
第19図	C-4区土器群出土土器実測図 (1 : 3)	(31)
第20図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(32)
第21図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(33)
第22図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(34)
第23図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(35)
第24図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(36)
第25図	包含層出土土器実測図 (1 : 3)	(37)
第26図	出土弥生時代鉄器実測図 (1 : 2)	(37)
第27図	出土石器、土製品実測図 (1 : 2)	(38)
第28図	30号不明遺構 (SX30) 実測図 (1 : 30)	(39)
第29図	34号石組遺構 (SX34) 実測図 (1 : 25)	(40)
第30図	35号不明遺構 (SX35) 実測図 (1 : 25)	(40)
第31図	古墳時代以降の出土遺物実測図 (1 : 3)	(41)
第32図	地点分布図 (1 : 3,500)	(43)
第33図	E・F地点出土土器実測図 (1 : 3)	(44)
第34図	遺構時期区分図 (1 : 500)	(45)
第35図	遺構変遷図 (1 : 1,250)	(46)

付 図 目 次

付図1 石鎚撲理遺跡群C地点・周辺遺跡出土土器編年図 (約1 : 9)

I はじめに

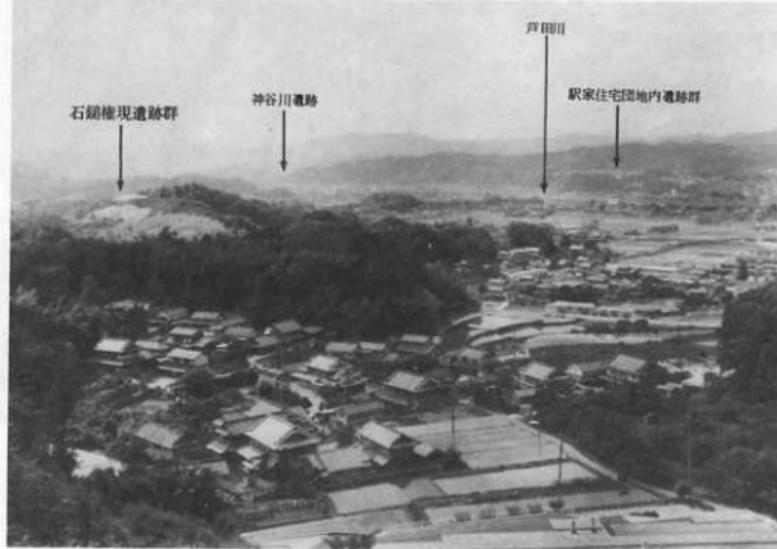
昭和55年度から始まった県営農地開発事業大橋地区造成地内の埋蔵文化財発掘調査は、今年度で第5年次を数える。今回の調査は、昨年度実施した石鎚権現第2号古墳の調査によって予想された丘陵斜面に立地する弥生時代集落（石鎚権現遺跡群C地点）及び同様の立地条件を有する同遺跡群D地点、及び西ヶ崎遺跡の3遺跡で実施した。

発掘調査は、文化庁と農林省との覚え書き「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」Ⅰの(5)にもとづき農業担当部局負担分と文化財保護担当部局負担分（農家負担分）に分けて行うことになり前者は石鎚権現遺跡群D地点及び西ヶ崎遺跡を財團法人広島県埋蔵文化財調査センターが、後者は石鎚権現遺跡群C地点を広島県立埋蔵文化財センターが実施した。

石鎚権現遺跡群C地点の発掘調査は、昭和59年5月14日から7月17日まで、約2,000m²について実施し、調査経費は5,000千円（内、国庫補助金2,500千円）である。

遺跡の発掘調査を実施するにあたっては、福山市教育委員会、福山教育事務所、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、広島県福山農林事務所芦品土地改良事業所各位の多大な協力を受けた。

また、発掘作業は、地元今岡、大橋地区の方々の御尽力をいたいた。記して深甚の謝意を表します。



石鎚権現遺跡群と周辺遺跡

Ⅱ 位置と歴史的環境

石鈴椎現遺跡群は、福山市駅家町大橋に所在する。ここは、東流する芦田川の南岸地域にあたり、丘陵上からは、芦田川を越えて駅家、神辺の流域最大の沖積平野を眺望におさめる。本遺跡の所在する大橋周辺は、南の山塊から延びた丘陵裾部に中小の谷が入り組み、弥生時代以降の遺跡立地としては恰好の地形を織りなしている。また、芦田川の北岸地域に比べて沖積平野の広さは狭いが、入り組んだ谷々が、南の松永溝にむける交通路となっていることも遺跡立地の重要な要素と考えるべきであろう。このことは、本遺跡周辺の福田池で、松永溝岸から持込まれたと考えられる製塙土器が多量に出土したことからも実証される。⁽¹⁾

ところで、本遺跡周辺の遺跡は、旧石器～縄文時代のものはわずかに散見されるとどまるが、次の弥生時代になると遺跡は飛躍的に増大する。前～中期の遺跡は明確なもののは少ないが新市町・大森地区で前期末～中期前半にかけての土器が比較的まとまって出土している。他に中



第1図 周辺遺跡分布図(1 : 50,000 井原)

- | | | | |
|-------------|----------|-----------|-----------|
| 1.石鈴椎現遺跡群 | 2.西谷古墳 | 3.長迫遺跡 | 4.出尾池遺跡 |
| 5.西ヶ崎遺跡 | 6.下高倉古墳 | 7.錢山古墳 | 8.大佐山白塚古墳 |
| 9.堀越・大塚谷遺跡群 | 10.才谷遺跡群 | 11.手坊谷遺跡群 | 12.地蔵堂遺跡群 |
| 13.池ノ内遺跡群 | 14.二子塚古墳 | 15.宝塚古墳 | 16.山の神古墳 |
| 19.亀山遺跡 | | | |

期の遺跡として、向永谷の西ヶ崎遺跡、大橋の長迫遺跡等で集落跡が調査され、前者は、短期間に何度も建替えを行った長屋状の建物が数十棟検出されている。特に中期後半以降遺跡は質・量とも増大し、芦田川北岸の中島地区では標高40~50mの丘陵上に営まれた地蔵堂、手坊谷、池ノ内、堀越大塚谷の各遺跡群が調査によって明らかになっている。後期の遺跡は本遺跡群や新市町・神谷川遺跡等、丘陵上及び斜面に立地する遺跡が多く、神辺平野の大宮遺跡、御領遺跡のように沖積平野に営まれた集落は明らかになっていない。駅家の平野部に神辺平野と同様の低地性集落が存在するものか、あるいは何らかの要因によって集落立地が異なるのかは、今後の調査にまちたい。

古墳時代の遺跡は、古墳を除くと著しく少ない。現状では、中島地区の才谷遺跡群で6~7世紀の方形住居跡が単独で検出されたものの他、石鎚櫛現第5号古墳墳丘下の7世紀代の方形住居跡状遺構をあげ得るのみである。同時代の集落は、可耕地の拡大に伴って芦田川河岸の沖積平野に存在する可能性が高い。今後、平野部の畠高地、及び縁辺部の調査がまたれる。一方、古墳は周辺の丘陵上に数多く存在し、また内容の明らかになったものも少なくない。これらの中には、当地域の代表的古墳も多く含まれている。古式のものは、新市町・潮崎山古墳、福山市・石錦山古墳群等が4世紀代に比定され、ともに船形鏡を出土している。また、5世紀代の古墳は、多数の鉄製武器類を出土した神辺町・龜山第1号古墳や仿製鏡を出土した法成寺の掛追第6号古墳などが北岸地域に集中する。本遺跡周辺の南岸地域には、入り組んだ谷々を見下す丘陵上に、4世紀代の長迫古墳群や5世紀代に相次いで築造された石鎚櫛現古墳群、仿製鏡を出土した今岡小池古墳などが存在する。概して、4~5世紀代の前半期古墳は、北岸地域に畿内指向型の大型円墳が集中するのに対して、南岸地域は前方後円墳を含みながらも在地色の強い古墳群が形成され、若干様相を異にする。このことは、6世紀以降の横穴式石室導入後には一層明白な差異となって表われ、北岸地域に6世紀代の二子塚、二塚、宝塚、山の神、大迫金環塚等の大型横穴式石室墳が集中するのに対して、南岸地域にはこの時期の卓越した古墳は見られない。7世紀に入ても、北岸地域の優位はつづき、切石を使用した横口式石槨墳等、特異な古墳が谷奥部に点在する。

註（1）篠原芳秀氏教示（府中高校他調査）

（2）小田原昭嗣氏教示（新市町調査）

（3）広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡』1982年。

（4）広島県教育委員会『県份駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976年。

（5）豊元田・甘柏徳「備後神谷川の弥生式遺跡」『吉備考古』75 1948年。

（6）広島県教育委員会『大宮遺跡』— 第1~5次発掘調査報 — 1978~1982年。

（7）神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告』!~!—御領遺跡発掘調査概報—1981~1983年。

（8）藤坂光彦「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学研究』90 1979年。

（9）広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『石錦山古墳群』1981年。

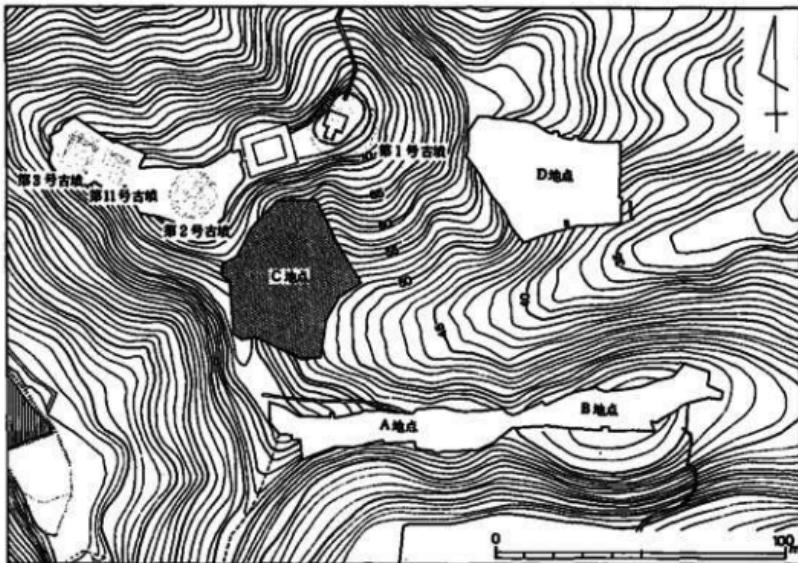
（10）広島県教育委員会『龜山遺跡』第1~2次発掘調査報 1982年~1983年。

（11）掛追古墳調査団『備後掛追古墳』『芸備文化』5・6合併号 1986年。

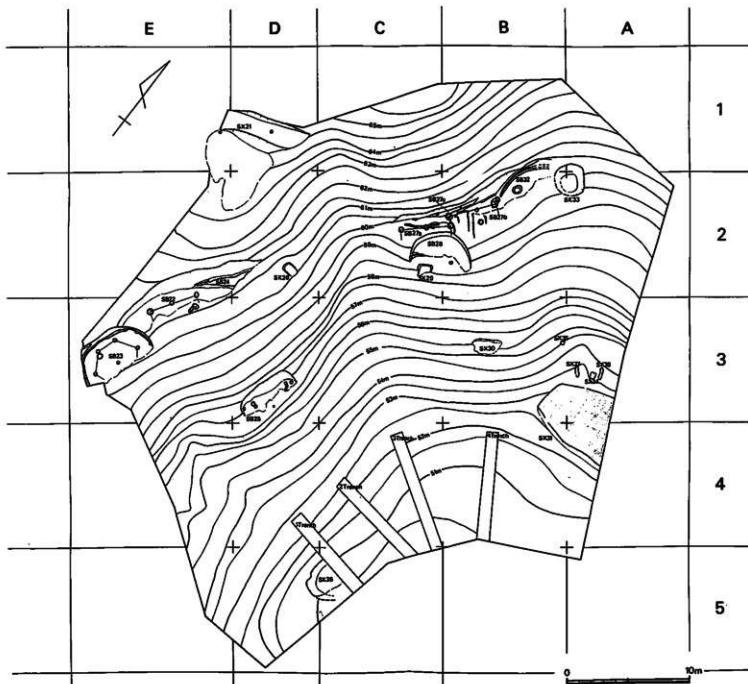
III 調査の概要

石錐複現遺跡群C地点は、東から西へえぐり込んだ谷の最奥部の南東向きの斜面に立地する。傾斜角度はほぼ30°前後で、造構以外の部分はかなり急傾斜で谷に落ち込む。調査区は便宜上10m（一部7m）四方のグリッドを設定し、北東から南西へA～E、北西から南東へ1～5までの記号と番号を付し、その組み合せで1つのグリッドを示すことにした。また、遺跡は昨年度調査を実施した第2号古墳周辺の弥生時代造構と一連のものと考えられたため、造構番号は昨年度のものにつづけて21から通し番号とした。

検出した造構は、弥生時代の住居跡・建物状造構8棟分、土壙4基、土器窯2ヶ所、不明造構2ヶ所の他、古墳時代の不明造構1、平安時代の墓と思われるもの1基、石組造構1基である。弥生時代の造構がほとんどで、住居跡・建物状造構は、25号（SB25）を除いて大きく2群に分かれる。すなわち、22～24号（SB22～24）の西側の一群と小さな谷地形を挟んで27a・b・c・28・32号（SB27a・b・c・28・32）の東側の一群である。ともに円形竪穴式住居跡と2×1間の長棟の高床倉庫状建物が重複関係をもって存在している。斜面に立地する遺跡であるため、当時は、各住居跡へ通じる通路等が存在したことが考えられるが調査ではその痕跡は検出できなかった。ただ、21号段状造構（SX21）は丘陵尾根から頂部に通じる通路状の造構である可能性が考えられる。同様の造構が昨年度調査区でも検出されている（SB4の東



第2図 周辺地形図(1:2,000)



第3図 陪葬配置図(1:300)

側の通路部分）。23号住居跡（SB23）は、埋土に多量の炭化物を含んでおり炭化材の中には建築用部材と考えられるものもあることから、火災に遭って倒壊したものと考えられる。この住居跡からの出土遺物は少ないが、床面よりやや浮いた状態で炭化材の中から出土した長い逆刺をもつ無茎鰐長三角形式の鉄鎌は、弥生時代の同種の鉄鎌の中では最も大きい部類に入り、貴重な資料である。22・27a・27b号建物跡（SB22・27a・27b）は、2×1間の掘立柱の建物と想定されるが柱穴の規模も大きく平坦面の造成も広いことから、高床倉庫状の建物と考えられる。28号住居跡（SB28）は、円形竪穴式住居跡と考えられるが、床面に柱穴らしきものが皆無で、特異な存在である。床面付近からの出土遺物は極めて少ない。31号不明遺構（SX31）は敷地形がやや谷状に凹む部分に硬く土を駿きしめて土間状につくりだしたもので、硬くしまった土層には弥生土器の細片を多く含んでいる。床面には柱穴、溝等の施設はなく、用途不明の貼床遺構である。ただ、この遺構のすぐ上方（北側）には、土器溜としたSX37・38が存在し、この遺構は、本来完形の土器を並べて置いていたものと考えられ、土器の中には体部穿孔の壺や、岡山方面からの搬入品と考えられる大型丹塗壺形土器と考えられる破片も含まれている。このことは、これらの遺構が何らかの祭に伴うものであることを想起させ、31号不明遺構（SX31）もこれらに関連する祭場であった可能性が考えられる。調査区掘部には遺構は少ないが、床面に土器を一括廃棄したと考えられる36号土壙（SK36）が存在する。土壙の用途は不明であるが、出土土器は良好な一括資料として評価される。

弥生時代以外の遺構としては、平安時代の須恵器、鉄釘、鉄刀子を出土した30号不明遺構（SX30）が注目される。完形の須恵器の周辺に鉄釘が散在して出土することから、木櫃等が存在したことが考えられ、副葬品と思われる布で巻いた刀子も出土している。これらのことから、SX30は、火葬骨を納めた墳墓である可能性が高い。他にこの時期の遺構として34号石組遺構（SX34）が存在するが、土器を伴出しておらず細かな時期は推定できない。

遺物は、遺跡が斜面に立地することから調査区全域から多数出土した。調査では、一括廃棄された土器及び遺構床面上のものを検出することに重点を置き、遺構の埋土から出土したものとは区別した。また、包含層中から出土した土器も、まとめて出土したものは、ある程度使用の同時性が考えられるものとして、所属時期の検討等の参考とした。遺物の中で注目されるものとしては、前述の大型鉄鎌の他、鉄ノミ、刀子等の鉄製品が比較的多く出土した。また包含層中からであるが、後期土器に混在して磨製石庖丁、石製投弾、砥石等が出土した。出土土器には多種多様なものがあるが、24号住居跡（SB24）出土の頭部に丹塗のストライプを施した壺形土器や、搬入品と考えられる大型壺形土器、胴部上半に明瞭なタタキ目のある壺形土器等が注目される。

以上が調査成果の概要であるが、本遺跡はその立地の特異性とともに、遺物の豊富さは、その生産基盤の追求、遺跡立地意図の追求、また備後南部地方の弥生後期の土器編年等にますます興味を喚起する遺跡であろう。

IV 遺構と遺物

1. 弥生時代の遺構

21号段状遺構 (S X21)

丘陵頂部（第2号古墳）から南へ延びる尾根が、やや傾斜をゆるやかにする傾斜変換点に位置し、尾根線に直交するように地山を削平した幅1.20～1.50m、長さ6.50mの平坦面である。床面中央付近に直径0.20m、深さ0.18mのピットが存在するが、他には何ら施設はない。用途不明の遺構であるが、類似したものを、昨年度調査区の4号住居跡状遺構 (S B4) で検出しておらず、これと同様に推測すれば何らかの通路的役割をはたした遺構と考えられる。床面付近から弥生土器の細片數十片が出土した。

22号建物跡 (S B22) (第4図・図版3a, 5)

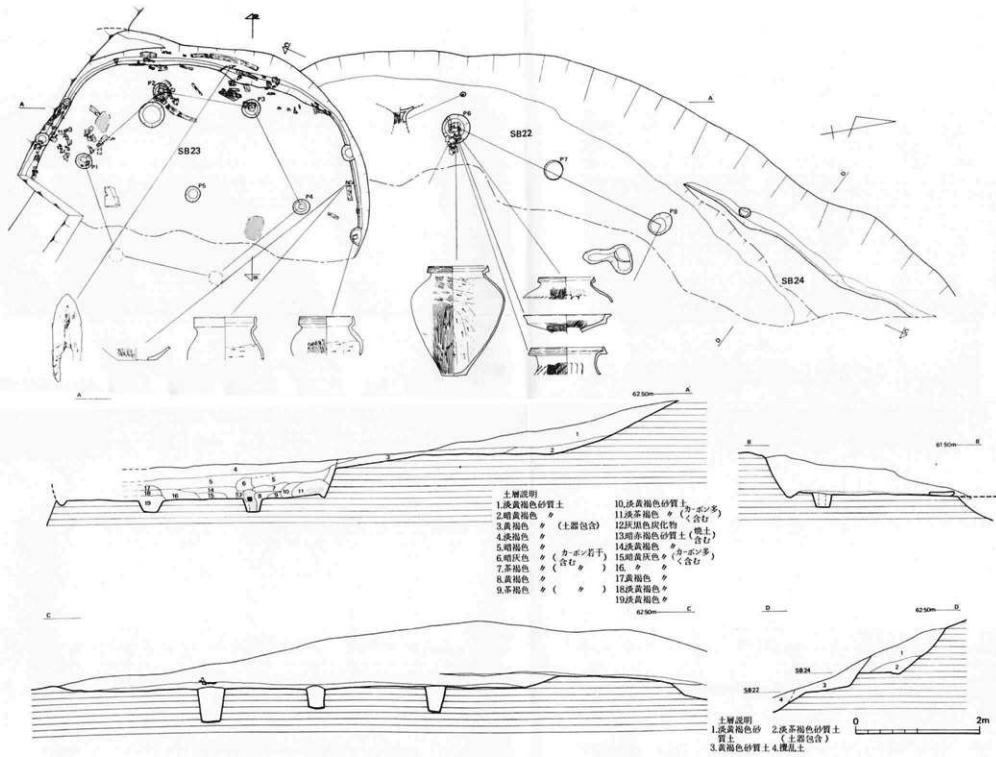
21号段状遺構 (S X21) の南約15mの尾根上のやや東に偏って存在し、23・24号住居跡 (S B23・24) と重複する。土層断面の觀察から先後関係は、24号住居跡 (S B24) より新しく、23号住居跡 (S B23) より古い。遺構は、尾根線に斜交する方向に地山を、幅1.50m、長さ8.00m以上削平して平坦面を形成し、2×1間の建物を配置したもので、斜面側の柱穴は貼床面とともに流出して検出できなかった。柱穴は直径0.30～0.40m、深さ0.30～0.50mで、柱間寸法1.70～1.90mとする。これらのことから、高床倉庫状の建物と考えられる。遺物は、P6上及び周辺の削平面上から弥生土器が一括投棄された状態で出土している。これらの土器はその出土状況から、この建物の廢絶（柱の抜取り）後、意図的に投棄されたものと考えられる。

23号住居跡 (S B23) (第4図・図版3b, 図版4a・b)

22号建物跡 (S B22) の南に一部重複して存在する直径5.50m程度の円形竪穴式住居跡で、床面の斜面側は流出して存在せず、壁体の南側も工事により削平されていた。主柱穴は4本検出でき、本来6本柱の住居跡と推定される。床面中央にも柱穴状のピットが存在する。柱間寸法は、P1～P2で1.65m、P2～P3で1.50m、P3～P4で1.75mとする。壁体の南西側の部分を一部削出して段を設けており、この部分に出入口が付設されていた可能性が高い。埋土には広範囲に炭化材、焼土塊等を含んでおり、この住居跡は火災に遭って倒壊したものと推測される。遺物は、床面の南西部に台石が存在する他、壁体溝内から小型壺形土器の破片、尾根側中央の壁体付近で、床面から約0.1m浮いた状態で鉄鏃（第26図145）が出土した。

24号住居跡 (S B24) (第4図・図版3a)

22号建物跡 (S B22) の北東に接して存在し、これにより削られた住居跡で、尾根側の壁体に添って溝が走る。この壁体溝の現存長4.60mで、溝内に不整形のピットが存在する他は、柱穴等は全く検出できなかった。床面付近から丹塗壺形土器、器台形土器の破片が出土した。



第4図 22号建物跡、23・24号住跡(SB22～24)実測図(1:60)

25号住居跡（SB25）（第5図・図版9）

22号建物跡（SB22）の東約10mの斜面に位置する。他の住居跡、建物跡等は2～3軒が重複して群構成をなすのに対して、この住居跡のみ地形的制約からか単独で存在する。床面は、ほとんど貼床で形成されており、不安定なためほとんど流出して遺存状態は悪い。わずかに壁体溝の一部と床面に据えられた台石が遺存していた。柱穴は、直径0.15～0.20m、深さ0.20～0.30mの小規模なものを7本検出したが、配置は不規則で整然としない。現存長4.50m、現存幅0.65mである。出土遺物は、床面の台石周辺から弥生土器の鉢形土器片が出土した。また、この住居跡の埋没後に、上層にまとまって流入したと考えられる土器群が存在する。これらの土器群は、床面出土の土器よりも古い様相をもっており、どのような経緯で流入したか判然としないが、その出土状況から廃棄の同時性が考えられ、25号住居跡上層土器群としておく。

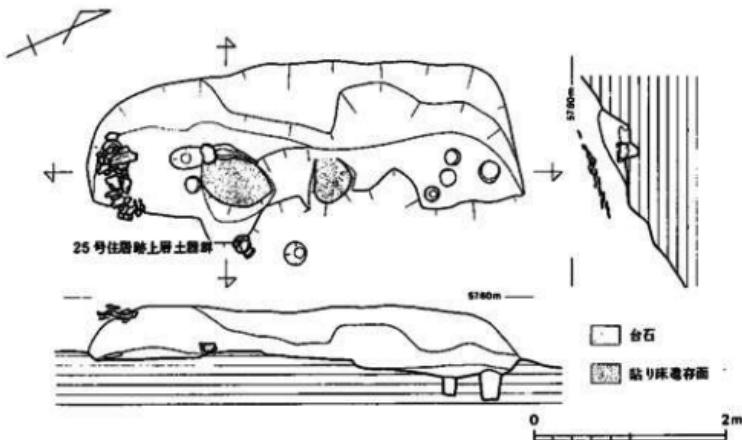
26号土壙（SK26）（第6図）

24号住居跡（SB24）の北東約5mの斜面に位置する隅丸長方形の土壙である。壁体は斜面側では流出して遺存状態は悪い。規模は底面で0.55×0.90m、壁高は現存高0.50mである。この土壙は、埋没後削半されて上面に貼床を施しており、本来土壙の埋土は第2層のみである。第1層としたものは、黄褐色土を敲きしめた版築状の整地土層である。土壙の用途については、不明である。遺物は、第2層より弥生土器片が数片出土した。

27a・b・c号建物跡（SB27a・b・c）（第7図・図版6、7）

22号建物跡、23・24号住居跡（SB22～24）群の北東約20mの斜面に位置するもう一つの住居跡群の中に含まれる建物跡で、ほぼ同一の剖面に3棟の建物跡（SB27a～c）を検出した。

27a号建物跡（SB27a）は、棟方向を北東にとる2×1間の建物跡で、柱間はほぼ1.90m



第5図 25号住居跡（SB25）実測図（1:60）

とする。柱穴規模は、P 1・2で直径0.40m, 深さ0.45m, P 3で直径0.35m, 深さ0.30mである。桁行の中央の柱穴の周辺に不規則な溝状の凹みが存在する。南東側の大半を28号住居跡(S B28)によって削り取られている。遺物はP 2内より弥生土器片が数片出土した。

27 b号建物跡(S B27 b)は27 a号建物跡の北東に接する同様な建物跡で、柱間はP 4～P 6で2.20m, P 5～P 6で1.50mとする。柱穴規模はP 4・5で直径0.50m, 深さ0.70m, P 6で直径0.20m, 深さ0.20mである。削平面に不整形の浅い凹みが存在する。遺物は削平面上及びP 5内から弥生土器、敲石等が出土した。

27 c号建物跡(S B27 c)は、前述の建物跡の壁体に添って細長く残った削平面で、壁体に添って不明瞭な溝、小規模ピット等が存在する。この削平面に対応する柱穴が検出できなかつたことから、この遺構は単独の建物跡とするより、通路等の遺構の残存したものかあるいは、27 b号建物跡(S B27 b)に伴う削平面である可能性も考えられるが、調査では判然としなかつた。遺構相互の新旧関係は、27 a号建物跡(S B27 a)→27 b号建物跡(S B27 b), 27 c号建物跡(S B27 c)→28号住居跡(S B28)である。

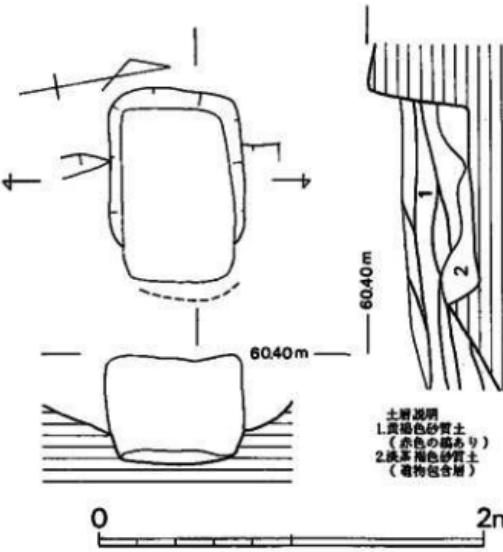
28号住居跡(S B28)(第7図・図版8)

27 a号住居跡(S B27 a)の削平面の南東側を大きく削込んだ円形竪穴式住居跡で、直径4.50m, 壁高0.80mである。床面の斜面側の大半は貼床で、調査時にはほとんど流出していた。床面には壁体溝は存在せず、柱穴も明確なものはない。流出した貼床部分に柱穴が存在したと

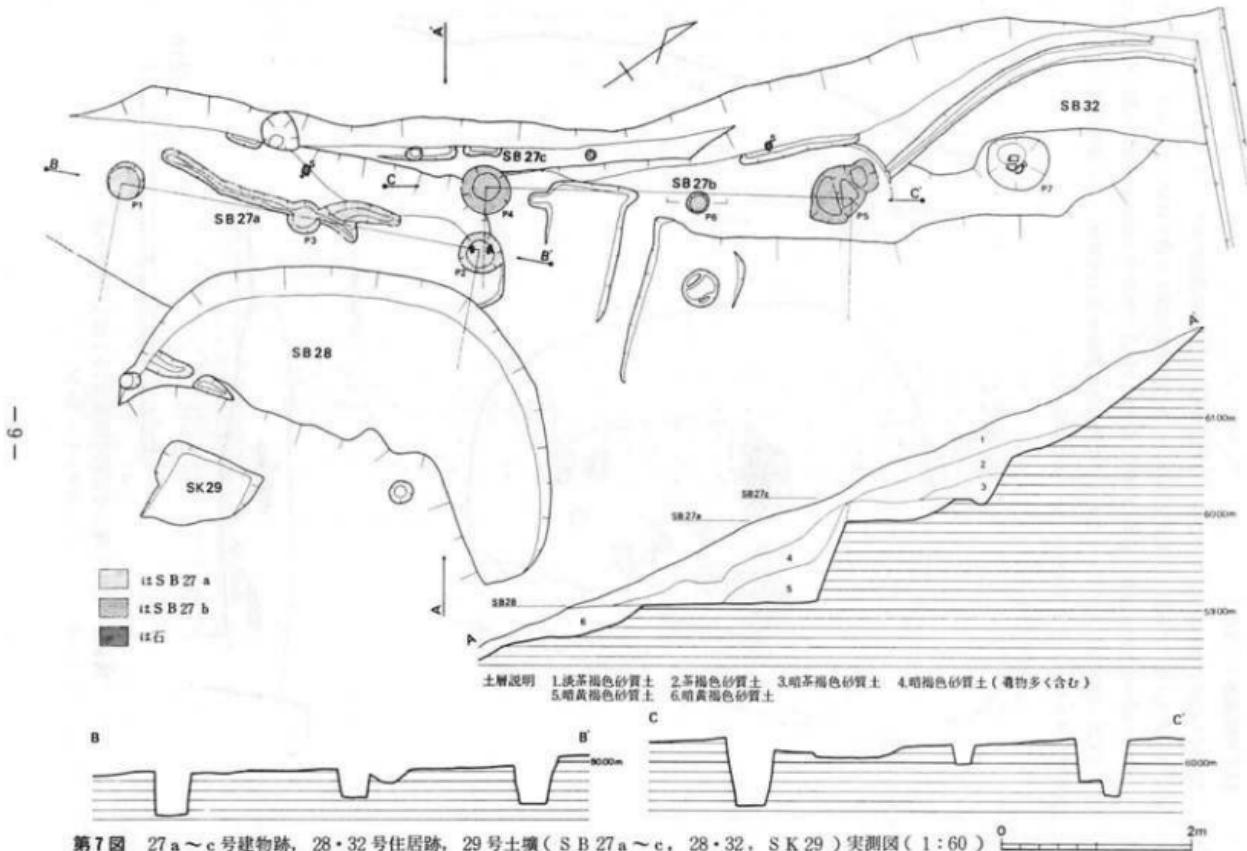
すれば痕跡状に残るピットを一方の主柱穴として二本柱の上屋構造が考えられる。遺物は床面からは極めて少なく中央付近から弥生土器の壺形土器片が一点出土した。

29号土壙(S K29)(第7図)

28号住居跡(S B28)の流出した貼床部分から検出された長方形土壙である。やはり斜面側が流出しており現存長0.9m, 幅1.0m, 壁高0.3mである。遺物は埋土及び底面付近から弥生土器片が数十片出土しており、28号住居跡(S B28)の付属施設かと考えられる。



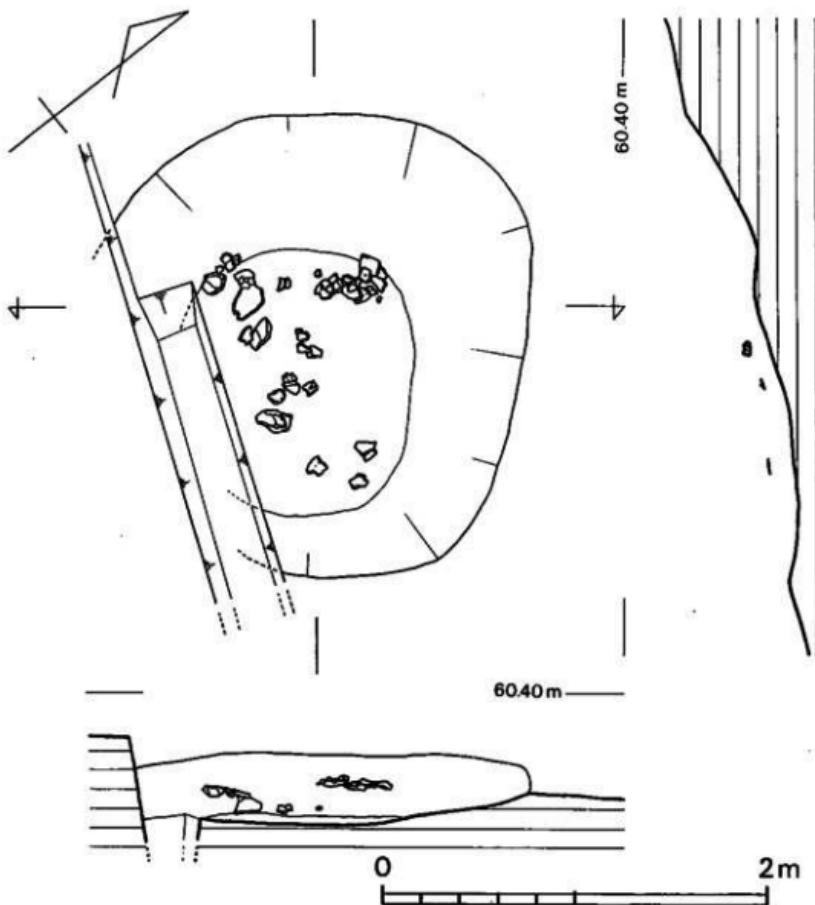
第6図 26号土壙(S K26)実測図(1:30)



第7図 27a～c号建物跡, 28・32号住居跡, 29号土壤(SB 27a～c, 28・32, SK 29)実測図(1:60)

31号不明遺跡（S X31）

調査区東端の谷部に貼床状に盛土整形した平坦面で、東側は調査区外につづいている。床面には何ら施設はなく、床面上の遺物も少ない。この遺構を形成する盛土は硬くよくしまっており、弥生土器片を含む。遺構の性格は不明であるが、付近に完形の土器を並べた37・38号土器塗（S X37・38）が存在するところから、これらとの関係を考えた場合、この遺構は何らかの集落祭祀にかかわるものではないかと考えられる。



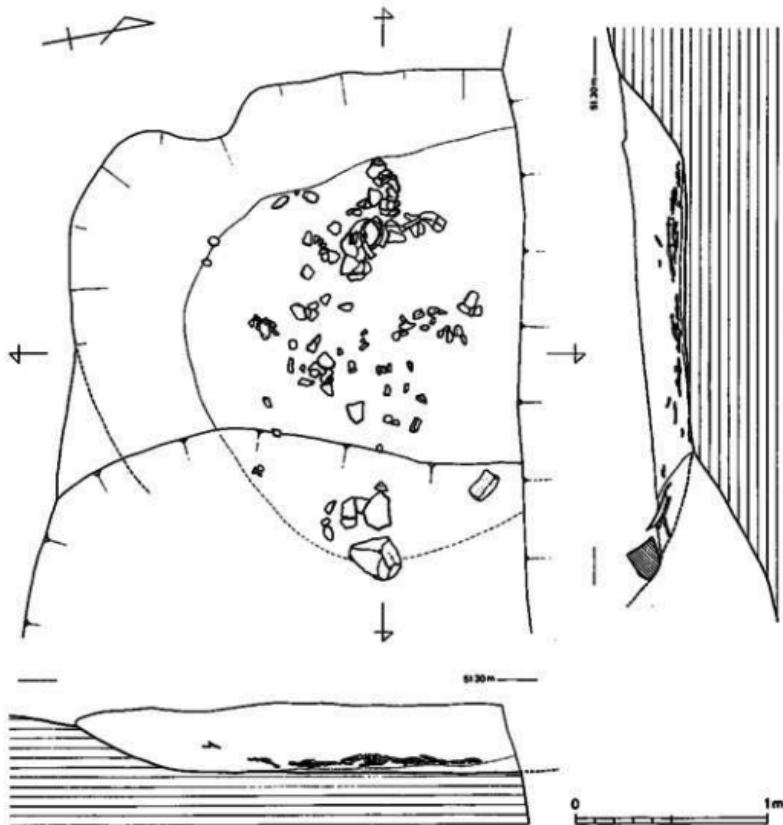
第8図 33号土塗（S K33）実測図（1:30）（灰色は石）

32号住居跡（S B32）（第7図・図版11a）

27b号住居跡（S B27b）の削平面の北側のつづき部分で、弧状の壁体溝の痕跡と柱穴（P7）を検出した。床面の大半は斜面に盛土した貼床で、遺存状態は悪く規模等は明確にできない。検出した柱穴は1本であるが、規模は大きく直径0.55m、深さ0.60mである。埋土に円錐、弥生土器を含んでおり、これらは柱の抜き取り後に投げ込まれた状態で出土した。

33号土壙（S K33）（第8図・図版6a）

32号住居跡（S B32）に北接する皿状の浅い土壙で、直径2.40m、深さ0.60mである。底面から0.10～0.15m浮いた状態で弥生土器、砾等が出土した。32号住居跡（S B32）の床面を削り込んでつくられており、これよりは時期的に新しい。土器が底面より浮いて出土しており、底面も凹凸があるところから、自然が形成した凹地である可能性もある。

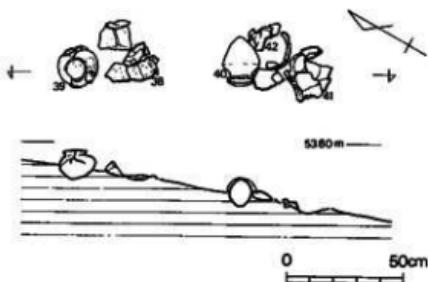


第9図 36号土壙（S K36）実測図（1:30）（灰色は石）

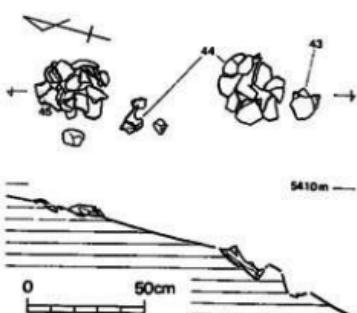
36号土壙 (SK36) (第9図・図版10b)

調査区の裾部で検出した土壙で、遺構の中では最も低い地点に位置する。このため遺構は、地山ではなく黄褐色の二次堆積土中に掘り込まれており、平面プランでは検出できず、最終的には深掘りのトレンチ (1トレンチ) の断面で確認した。完掘後の平面プランは不整形の円形の土壙となるよう、斜面側の掘方は不明瞭で検出できなかった。しかし、遺物の出土状況から斜面側でも壁が立上がる事が確認された。規模は直径約2.7~3.5m、深さ0.3mである。底面から0.05~0.10m浮いた状態で、弥生土器片が多數出土した。出土状況から、これらは使用の同時性が考えられる一括資料としてよいだろう。また、土壙の東端に存在する人頭大の角礫は砾石として据えられたものである。このことからこの土壙は、何らかの作業場的性格をもつものと考えられるが、他に具体的な用途を示す遺物が出土しておらずどのような作業がこの土壙内で行なわれたかは推定できない。土器類は土壙の廃絶後に投棄されたものである。

37号土器溜 (SX37) (第10図・図版12b) 31号不明遺構の北東上手に存在する二つの土器溜



第10図 37号土器溜 (SX37) 実測図 (1/25)
(灰色は石、番号は遺物番号と一致する)



第11図 38号土器溜 (SX38) 実測図 (1/25)
(灰色は石、番号は遺物番号と一致する)

の一方で、變形土器4個体、鉢形土器1個体が据置かれた状態で出土した。土器類はすべて日常容器で、体部に煤が付着するものが多い。しかし、完形で出土した變形土器の体部下半に人为的な穿孔がみられることなどから、集落祭祀に関わる供獻土器群と考えられる。

38号土器溜 (SX38) (第11図・図版12a) 37号土器溜 (SX37) の東側約2.0mの斜面に存在する同様の土器溜である。しかし、土器の内容は異なり、この土器溜では大型丹塗壺形土器を含む壺形土器が2個体、變形土器1個体である。出土状態では壺形土器片が広範囲に飛散し、故意に打割られたことが考えられる。

2. 弥生時代の遺物

a. 土器

22号遺物跡 (SB22) (第12図1~5)

壺形土器（1）口縁部は折曲げて内傾して立上がり、外表に3条の回線文を施す。頭部は太くゆるやかに外反して、外面にヘラによる「ノ」の字状文がめぐる。調整はナデを基本とし、口径17.3cm。

壺形土器（2・3）ともに胴部最大径が上半にあるタイプの壺形土器である。2は直立ぎみの口縁部外表に2条の鈍い回線文を施し、胴部最大径付近に板状工具の刺突による左回りの「ノ」の字状文がめぐる。内面ヘラケズリは胴部上半まではとどかない。口径13.2cm。3も形態的に同様であるが、2より胴の張りが弱く、口縁端部が尖りぎみとなり外表に3条の鈍い回線文を施す。内面ヘラケズリは頭部に及び、外面胴部上半にはナデの下に細い平行タタキの痕跡がのこる。口径13.7cm、器高27.6cm、胴部最大径21.7cm、底径5.6cm。

高杯形土器（4・5）4は口縁部に平坦面をもつ杯部で、口縁部はゆるやかに外反し、やや拡張された平坦面には回線文はない。杯部内底面は円盤充填手法をとり、口径21.6cm。5は円盤充填手法をとる杯部内底面及び脚柱部で、脚柱部内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキとする小型の高杯形土器と考えられる。

23号住居跡 (SB23) (第12図6~8)

壺形土器（6・7）ともに小型の壺形土器で、口縁部は直立ぎみに上方に拡張し、7では外表に3条の不明瞭な回線文を施す。内面ヘラケズリはともに胴部上半中位まで及ぶ。口径9.8cm(6)、8.5cm(7)。

底部（8）小型の壺または鉢形土器の底部と思われ、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリとする。底径5.8cmの薄手のものである。

24号住居跡 (SB24) (第12図9・10)

壺形土器（9）口縁部がラッパ状に大きく外反し、屈曲する頭部に球形の胴部が接続すると思われる。頭部屈曲部には、成形時に低い突窓をつくりだし、その周辺を帯状に赤色顔料で彩色している。口縁部及び頭部は細かいハケ目及びナデ調整を基本とし、胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリとする。口径18.5cm。

器台形土器（10）口縁部はやや内傾して上下に拡張し口縁帯を形成し、外表に3条の鈍い回線文状の凹凸がめぐる。内外面ともナデを基本とするが、受け部外面はヘラケズリのちヘラミガキとする。口径26.0cm。

25号住居跡 (SB25) 上層土器群 (第13図11~14)

壺形土器（11・12）11は口縁部が直立して立上がり、外表に2条の鈍い回線文状の凹凸がめぐる。頭部はゆるやかに外反して胴部につづき、内外面ともナデを基本とする。口径15.5cm。

12はやや内傾ぎみに立上がりの口縁部に、ゆるやかに外反する頸部がつづく。頸部中央にヘラによる「ノ」の字状文がめぐり、内外面ともナデを基本とする。

壺形土器（13）口縁部がほぼ直立して立上がり、外表には純い凹凸がある。胴部はやや球形に張り出し、外面胴部下半はヘラミガキ、上半は幅広のハケ目をのこす。内面ヘラケズリは、胴部上半まで及ぶ。口径13.3cm。

鉢形土器（14）口縁部がやや内傾して立上がり、外表に5条の純い凹線文状の凹凸がめぐる。頸部は深く湾曲し、胴部は鋭く屈曲して稜をもつ。胴部下半内面は横方向のヘラケズリ、外面は横方向のハケ目のあと粗いヘラミガキとし、他はナデを基本とする。口径47.0cm。

25号住居跡（S B25）（第13図15）

鉢形土器（15）口縁部が「く」の字状に屈曲して開く単純口縁をなし、胴部はゆるく内湾する。胴部内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキとし、他はナデを基本とする。口径19.3cm。

27 b号住居跡（S B27 b）（第13図17～21）

壺形土器（17）口縁部が内傾ぎみに立上がり、外表に3条の凹線文を施す。頸部は大きく湾曲して、胴部につづくようである。口径18.8cm。

壺形土器（18）口縁部は内傾ぎみに立上がり、外表に1条の凹線文を施す。頸部は口縁部から強く屈曲して胴部につづく。胴部外面にハケ目をのこし、内面ヘラケズリは上半まで及ぶ。他はナデを基本とする。口径11.9cm。

高杯形土器（19）口縁部が直立して、上面に平坦面を形成する。平坦面は中央がやや凹むが凹線文はない。杯部の器壁は厚く、やや深い器形となるようである。

鉢形土器（21）口縁部が内傾して立上がり、外表に4条の凹線文を施す。口縁、頸部とも折り曲げて強く屈曲させて、胴部上半につづき、胴部中位で屈曲して稜をもつタイプの鉢形土器と思われる。調整はナデを基本とする。口径34.7cm。

底部（20）壺形土器の底部と思われ、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリとする。底部側面の底面付近はヘラミガキがナデ消されている。底径7.0cm。

28号住居跡（S B28）（第13図16）

壺形土器（16）口縁部が直立ぎみに立上がり、外表にわずかな凹凸がめぐる。頸部はゆるやかに内湾して胴部につづき、頸部下半外面に板状工具による「ノ」の字状文がめぐる。器面は風化して調整は不明である。口径11.6cm。

32号住居跡（S B32）P 7（第14図22～25）

壺形土器（22）口縁部は貼付けて直立させ、外表に3条の凹線文を施す。口径15.2cm。

壺形土器（23、24）23は口縁部が直立ぎみに立上がり、外表に2条の細い凹線文を施す。頸部はやや強く屈曲して、胴部は張らない。内面ヘラケズリは頸部まで及ぶ。口径15.2cm。24は口縁部が直立して、外表は無文。頸部の屈曲はゆるく、胴部は張らない。器面は風化して調整は不明である。口径11.3cm。

鉢形土器（25）口縁部がやや内傾して立上がり、頭部が強く屈曲して胴部に稜をもって算盤玉状を呈する。口縁部外表に鈍い回線文を1条施す。内面へラケズリは胴部屈曲部まで外面はヘラミガキとする。口径23.9cm。

33号土壤（SK33）（第14図26～28）

壺形土器（26）口縁部が短く開き、端部はややつまみ上げて跳上げ口縁状を呈する。頭部は直立するが、ゆるやかに開いて胴部につづく。内外面ともハケ目の痕跡をのこすナデ調整とし、口頭部の境に成形時の指頭圧痕をのこす。口径15.5cm。

壺形土器（27・28）口縁部が直立して、外表に鈍い2条の回線文を施す。胴部は球形張り出し、内面へラケズリは頭部直下まで及ぶ。胴部外面下半はヘラミガキとし、部分的に煤が付着する。口径12.1cm。28は壺形土器の底部で、焼成前の穿孔をもつ。

36号土壤（SK36）（第14図29～37）

壺形土器（29）口縁部が内傾して立上がり、外表に2条の鈍い回線文状の凹凸がめぐる。頭部は短く「U」字状に湾曲し、胴部は大きく張り出す。調整はナデを基本とし、内面へラケズリは胴部上半まで及ばないようである。口径13.2cm。

壺形土器（30）口縁部がやや外反ぎみに直立し、外表に太い回線文状の凹みが1条めぐる。頭部は大きく湾曲して、すんなりした胴部につづく。内面へラケズリは胴部上半中位まで及び他はナデを基本とする。口径11.9cm。

鉢形土器（31・32）31は口縁部が短く開く単純口縁をなし、頭部はゆるやかに「く」の字状に湾曲する。内面へラケズリは頭部まで及び、他はナデとする。胎土に赤色土粒を含み他の土器とやや異なる。口径20.4cm。32は口縁部を上下に拡張して、外表に3条の回線文を施す。頭部外面はやや強く湾曲して胴部中位でゆるやかなふくらみをもつ。内面はヘラミガキとし、他はナデとする。口径23.8cm。

高杯形土器（33～35）33・34は屈曲部をもつ杯部で、33は強く屈曲して口縁部は大きく開き内面に回線文の残りをとどめる。杯部下半は内外ともヘラミガキとし、他はナデとする。口径22.0cm。34は外面のみ屈曲して口縁部は短く開き、口縁部の器壁は厚い。内面下半はヘラミガキとするが、他は風化して不明である。口径16.6cm。35は脚据部で、端部を若干上方へ拡張して、外表に鈍い1条の回線文を施す。内面はヘラケズリ、外面はラフなヘラミガキとする。底径12.0cm。

底部（36・37）ともに壺形土器の底部と思われるもので、内面へラケズリ、外面へラミガキとする。36は若干外方に張り出し、37はやや上げ底ぎみとなる。

37号土器（SX37）（第15図38～42）

壺形土器（38～41）38は口縁部が直立して、外表に太い回線文状の凹みがめぐる。頭部は「く」の字状に屈曲し、卵型の胴部につづく。底部は丸みを帯びた小さな平底を呈する。内面へラケズリは頭部直下まで及び、胴部外面下半はヘラミガキ、上半はハケ目をのこす。胴部中位に幅

5～6cmの帯状に煤が付着する。口径11.1cm、器高22.1cm。39は口縁部が外傾して立上がり、外表は無文。頭部はゆるやかに湾曲して短かい胸部につづき、底部はやや張り出しがみの小さな平底がつく。内面ヘラケズリは胸部上半まで及び、胸部上半～頸部に指頭圧痕をのこす。胸部外面下半はヘラミガキとし、他はナデとする。器壁は厚いが、器面は二次的な熱を受けて剥落しており、土器自体も脆い。暗褐色を呈し、胎土に赤色土粒を含む。口径10.3cm、器高15.4cm。40は完形で出土したもので、口縁部は直立して、外表に鈍い3条の凹線文を施す。頭部はゆるやかに湾曲して、胸部はやや肩が張りぎみとなり、底部は不明瞭な張り出しがみの小さな平底がつく。胸部下半に長方形形状を呈する焼成後の穿孔がある、内面ヘラケズリは頸部まで及び、胸部外面下半はヘラミガキ、上半にはハケ目をのこすが他はナデである。口径11.3cm、器高約18.9cm。41は口縁部が直立して、外表は無文。頭部はゆるやかに外反して胸部はよく張る。内面ヘラケズリは頸部まで及び、外面は全面に幅広のハケ目をのこす。胸部中位に幅4～5cmの帯状に煤が付着する。口径15.3cm。

鉢形土器（42）口縁部はやや内傾して立上がり、外表は無文。頭部は「く」の字状に屈曲して胸部は丸く張り出す。底部はやや大きめの平底がつく。内面ヘラケズリは頸部まで及ぶが、底部付近は成形時の補修のためか部分的にヘラミガキを施す。胸部及び底部外面は丁寧なヘラミガキとし、他はナデとする。口径17.1cm、器高約15.0cm。

38号土器群（SX38）（第16図43～45）

壺形土器（43・44）43は丹塗りを施す大型壺形土器で、口縁部と頭部は接合しないが頸部破片に透かしがないことや下端に「ノ」の字状列点文を配するところから器台形土器ではなく壺形土器と考えられる。口縁部はやや強く外反して大きく開き、端部は直立して上方へ大きく拡張し下方へも張り出す。外表に12条の凹線文を密に施した後、鋭い工具で鋸歯文を2帯めぐらす。頭部はよくしまって、外面に凹線文を密に施し、下端に「ノ」の字状列点文をめぐらす。胸部はやや強く屈曲して大きく張り出すと考えられるが、胸部の破片は1片も出土していない。調整はナデを基本とするが、口縁外反部の外面に細かいハケ目痕をのこす。頭部内面は風化して不明であるが、他は全面に丹塗りを施す。胎土に黒色の角閃石と考えられる砂粒を含み、全面に暗茶褐色を呈する。明らかに備後産の土器と胎土を異にする。口径28.3cm。44は口縁部がやや内傾して立上がり、外表に鈍い凹線文状の凹みを2条めぐらす。頭部はよくしまり、中央部に不明瞭なヘラ描き「ノ」の字状文をめぐらせ、胸部との境に鈍い凹線文を1条めぐらす。胸部は球形によく張り出す。内面ヘラケズリは頸部直下まで及び、胸部外面下半はヘラミガキ、上半はハケ痕をのこすナデとする。口径13.4cm。

壺形土器（45）口縁部がやや内傾して立上がり、外表に不規則な凹凸がめぐる。胸部は中央部でやや角ばって、不明瞭な小さな底部がつく。内側ヘラケズリは頸部直下まで及び、胸部外面下半はヘラミガキ、他は丁寧なナデとする。内底面に成形時の指頭圧痕をのこし、外底面も丁寧なヘラミガキを施す。口径12.9cm。

C-2区土器群1（第17図46～53）

壺形土器（46）口縁部が直立して、外表上端に不明瞭な凹線文状の凹みがめぐる。頭部には板状工具の刺突による綾杉状の文様をめぐらせ、胴部との境に凹線文を1条施す。内外面ともナデを基本とし、口径13.8cm。

壺形土器（47～50）47は口縁部が直立して、外表上端に鈍い凹線文がめぐり、下端もアクセントをもって張り出しがみとなる。胴部はよく張り出し、内面ヘラケズリは胴部上半まで及ぶ。頭部内面に指頭圧痕をのこして、他はナデとする。口径11.3cm。48は口縁部が直立し、外表無文。内面にナデによる凹線文状の凹みがめぐる。全面にナデとし、口径12.8cm。49は口縁部が直立して、外表に不規則な凹線文状の凹凸がある。頭部はゆるやかに湾曲して、胴部はほとんど張り出さない。内面ヘラケズリは頭部直下まで及び、他はナデとする。口径16.5cm。50は口縁部が直立して、上端が外反ぎみとなり、外表に3条の凹線文をめぐらす。胴部はよく張り出し、内面ヘラケズリは胴部上半中位まで及ぶ、胴部外面下半をヘラミガキとし、この部分に煤が付着する。その他の部分はナデとし、口径12.3cm。

鉢形土器（51～53）51は口縁部が直立し、外表に鈍い凹線文3条がめぐる。胴部は上半で稜をもって屈曲する。内面ヘラケズリは胴部屈曲部まで、胴部外面はヘラミガキとする。口径19.2cm。52は口縁部が直立し、外表に鈍い凹凸がめぐる。胴部は上半で稜をもって屈曲し、製作手法は51と同様である。口径17.8cm。53は手づくねの鉢形土器で、外面に指頭圧痕をのこし、全体をナデ調整している。口縁部が歪んでいるが、口径7.8cm、器高4.3cm。

C-3区土器群1（第17図54・55）

壺形土器（54）口縁部が尖りぎみに直立し、端部に弱いアクセントがつくが、外表無文。頭部は太く、外表に板状工具の刺突による綾杉状文がめぐる。胴部は球形に張り出し、外面は丁寧なヘラミガキ、内面ヘラケズリは頭部まで及ぶ。口径16.4cm。

鉢形土器（55）口縁部が直立して、外表に鈍い3条の凹線文を施す。胴部外面にヘラケズリのちヘラミガキを施し、内面は丁寧なヘラミガキとする。口径18.5cm。

C-3区土器群2（第18図56～59）

壺形土器（56～58）56は口縁部をつまみ上げて内傾させて拡張し、外表無文。頭部は短かく胴部は球形に張り出す。胴部外面下半は細かいヘラミガキ、上半はハケ目の痕跡をのこして、横方向の太いヘラミガキとする。内面ヘラケズリは頭部まで及び、縱横に細いケズリ痕がはしる。胎土に赤色土粒を含み、器壁は厚い。口径14.6cm。57は口縁端部を内傾させてわずかに拡張し、外表に鈍い2条の凹線文を施す。頭部は短かく胴部は球形に張り出すようである。内面ヘラケズリは頭部まで及ぶ。口径12.6cm。58は口縁部が短かく開き、端部はほとんど拡張しない。頭部は直立して胴部は球形に張り出す。頭部の境に棒状工具の刺突による列点文をめぐらす。外面は、口縁部を除いてヘラミガキとし、内面は指頭圧痕を多くのこす無調整である。胴部下半にわずかにハケ痕が観察される。口径16.5cm、胴部最大径22.6cm。

壺形土器 (59) 口縁部が内傾ぎみに立上がり、外表に太く鈍い回線文を2条施す。頭部はゆるやかに湾曲して、胴部は球形に張り出す。内面ヘラケズリは頭部まで及び、外面胴部下半はヘラミガキ、上半はハケ目をのこす。胴部下半に煤が付着する。口径17.5cm。

D-5区土器群1 (第18図60~62)

壺形土器 (60) 口縁部が短かく開き、端部は内傾して上下に拡張して、外表に2条の回線文を施す。頭部は直立して胴部は大きく張り出す。内面ヘラケズリは胴部上半までは及ばず、外面はヘラミガキとする。口径14.7cm。

鉢形土器 (61・62) 61は外傾ぎみに立上がり、外表に鈍い2条の回線文を施す。胴部中位で棱をもって屈曲し、内面ヘラケズリは胴部上半まで及ぶ。外面胴部下半はヘラミガキとし、他はナデとする。口径20.2cm。62は同形態の鉢形土器の底部である。

C-4区土器群1 (第19図63~68)

壺形土器 (67) 口縁部が直立して、外表に2条の回線文を施す。頭部も直立ぎみとなるようである。口径14.3cm。

壺形土器 (63・64・68) 63は口縁部が直立して、外表に明瞭な3条の回線文を施す。頭部はやや強く屈曲して胴部は球形に張り出す。内面はハケ目を明瞭にのこし、外面もハケ痕をのこすナデとする。口径16.0cm。64は口縁部を内傾して上下に拡張し、外表に明瞭な2条の回線文を施す。頭部は強く屈曲して胴部につづき、胴部上半でゆるやかに屈曲して肩のやや張った胴部を形成する。胴部上半にはヘラ状工具による「ノ」の字状の列点文がめぐる。内面ヘラケズリは胴部下半までで、上半は指頭圧痕をのこすナデとする。外面は胴部下半をヘラミガキ、上半はハケ目を明瞭にのこす。口径13.3cm、胴部最大径20.0cm。68も同形態の壺形土器で口縁部外表に明瞭な3条の回線文を施し、頭部の屈曲がやや鋭い。

鉢形土器 (65・66) 65は口縁部が内湾する小型の鉢形土器で、形態的に高杯形土器となるものかもしれない。全面ナデ調整とし、内面に指頭圧痕をのこす。口径15.3cm。66は口縁端部を内側に拡張して平坦面を形成し、5条の細い回線文を施す。口縁部と体部の境に屈曲部をもち、やや深めの鉢形土器である。体部外面はヘラミガキとする。口径23.4cm。

C-4区土器群2 (第19図69、70)

壺形土器 (69・70) 69は口縁部が直立し、外表中央に不明瞭な太い1条の回線文を施す。頭部の屈曲はゆるやかであるが、胴部上半にアクセントがありやや肩の張った器形を呈する。底部はややふくらみぎみの小さな平底がつく。内面ヘラケズリは胴部上半まで及び、器壁は極めて薄い。胴部外面下半はヘラミガキとし、他はナデとする。口径14.5cm、器高(推定)24.8cm。70は口縁部がやや内傾ぎみに直立し、外表に4条の回線文を施す。頭部は大きくくびれて、胴部は球形に張り出す。底部は小さな平底であるが明瞭な底部を形成し、胴部下半には橢円形の焼成後の穿孔が存在する。祭祀用に転用されたものと考えられる。内面ヘラケズリは頭部直下まで及び、胴部外面下半はヘラミガキとする。口径9.3cm、器高12.4cm。

各区包含層

壺形土器（第20図、第21図87～91）

A類（71・72）いわゆる短頭壺として分類できるもので、頭部が太く短かく、口縁端部は若干上下に拡張する。口縁部外表面に回線文を施し、72では部分的にヘラ状工具による不規則な刺突文を施す。調整はハケ及びナデとする。口径19.2cm（71）、18.0cm（72）。

B類（73～77）口縁部が大きく外反して開くもので、端部の拡張はやや内傾して上下に拡張するが、あまり大きくなない。外表面に回線文及び竹管刺突文、ヘラ刺突文等の文様を施すものが多い。77は形態的に器台形土器となる可能性がある。調整はナデがほとんどであるが、73のみ内面をヘラミガキとする。口径18.0cm（75）、25.4cm（76）、19.1cm（77）。

C類（78～80）口縁部の開きが小さく、頭部が直立ぎみとなるもので、端部の拡張は小さく、外表面に不明瞭な回線文を施す。直立する頭部にヘラ及び板状工具による「ノ」の字状文をめぐらす。79では頭胴部の境に太い回線文を1条施す。調整はハケ及びナデとする。口径16.0cm（78）、14.3cm（79）、17.2cm（80）。

D類（81～83）口縁部がゆるやかに外反し、頭部も外反して胴部につづくもので、端部の拡張も小さく、外表面に不明瞭な回線文状のものを施す。外反する頭部に明瞭な回線文や板状工具による「ノ」の字状刺突文をめぐらす。内面ヘラケズリは83では頭部直下まで及ぶ。調整はハケ痕を外表面によくこし、他はナデとする。口径20.7cm（81）、18.2cm（82）、18.7cm（83）。

E類（84～86）口縁部の開きは小さいが、端部を直立させて大きく拡張するもので、外表面に回線文が密に施されるもの（84）やゆるやかな凹凸のみのもの（85～86）がある。84では下端に爪形文を部分的に施し、頭部にも2条の回線文と板状工具による「ノ」の字状刺突文を絞杉状にめぐらす。調整は内外面ともナデとする。口径17.8cm（84）、17.6cm（85）、19.8cm（86）。

F類（87）単純口縁を有する小型のミニチュア土器で1点のみである。外反して開く口縁部に鈍い稜をもつ算盤玉状の胴部がつき、底部は不明瞭な小さな平底である。外面はヘラミガキを丁寧に施し、内面は指頭圧痕をのこすナデとする。口径5.5cm、器高6.9cm。

G類（88、89）口縁部が二重口縁をなし、短い頭部に稜をもって屈曲する算盤玉状の胴部がつくもので、量的には少ない。口縁部外表面に鈍い回線文状のものを施し、胴部屈曲部には明瞭な回線文を施す。内面ヘラケズリは胴部下半のみで、外面はヘラミガキを基本とし、他はナデとする。口径7.7cm（88）、9.9cm（89）。

H類（90）口縁部の開きが小さく、端部を垂直に上下に拡張して、外表面に明瞭な回線文を施すもので、頭部はゆるやかに外反して胴部につづく。淡茶灰色を呈し、胎土も他のものとやや異なり、形態的にも備後窯のものではなく、山陰地方にその出自が認められる形態のものである。直轄には中国山地内からもたらされたものと考えられる。口径17.4cm。

I類（91）口縁部形態は不明であるが、薄く短かい頭部に球形に張り出す胴部がつくもので、胴部上半内面に輪積みの痕跡を明瞭にのこし、下半はヘラケズリとする。

變形土器（第21図92～97、第22図98～103）

A類（92～95）口縁端部の拡張が小さなもので、外表に凹線文を施すA1類と無文のA2とに細分される。

A1類（92～94）口縁端部を上下に拡張するもの（92）と上方にのみ拡張するもの（93・94）とがある。この二者は、頸部の屈曲及び調整手法が異なる。前者では頸部の屈曲はゆるやかであるが、後者は稜をもって屈曲する。調整手法では前者は内面ヘラケズリが頸部直下に及び、外面はヘラミガキとするのに対して、後者は内面ヘラケズリが胴部上半まで及ばず、外面も93では粗いタキ痕をのこし、94はハケ痕をのこす。口径17.0cm（92）、14.4cm（93）、14.5cm（94）。

A2類（95）口縁端部はわずかに上方に拡張するが外表無文のもので、頸部はゆるやかに湾曲し、胴部もゆるやかに張り出す。底部は安定した平底がつく。内面ヘラケズリは頸部直下まで及び、外面も頸部直下まで丁寧なヘラミガキとする。調整手法はA1類の92と同様である。外面は口縁部まで煤が付着している。口径12.2cm、器高20.7cm。

B類（96～103）口縁端部を上方へ大きく拡張したもので、外表に凹線文を施すB1類と無文のB2類に細分される。

B1類（96～98）口縁端部を直立して大きく拡張し、外表に凹線文を施す。凹線文はA1類ほど明瞭ではなく、太く鈍い。内面ヘラケズリは胴部中位までのもの（96）と胴部上半に及ぶもの（97・98）がある。外面はヘラミガキとハケ痕をのこすものがある。96の胴部外面中央に0.85cm×0.42cmの粗圧痕がのこる。口径12.1cm（96）、12.4cm（97）、10.1（98）。

B2類（99～103）口縁部外表無文のものである。個別的には痕跡のこるものもあるが、総じてナデのみである。口縁部は直立して、頸部はゆるやかに湾曲して現形の胴部がつく。形態的にはほぼ同一の特徴を有するが、内面ヘラケズリは、頸部直下に及ぶもの（99・100・102）と胴部上半までのもの（101）丁寧にナデ消しているもの（103）等の違いがある。外面調整ではハケ痕をのこすものが多く、ヘラミガキを丁寧に施すものが少なく、A類とやや異なる。口径11.0cm（99）、14.3cm（100）、12.2cm（102）、13.3cm（103）。

鉢形土器（第22図104～108、第23図、第24図120～124）

A類（104～111）口縁部が二重口縁とならないもので、形態的にさらに4類に細分できる。

A1類（104・105）口縁端部を横方向に拡張するもので、端面に2条の凹線文をめぐらす。

口縁部と体部の境で屈曲し段をもつ。口縁部内外面をナデとし体部はヘラミガキとする。

口径20.9cm（104）、19.6cm（105）。

A2類（106～108）口縁端部を拡張せず、口縁部は「く」の字状に屈曲させただけのもので、外表に鈍い凹線文をめぐらす。他の特徴はA1類と同様であるが、体部外面のヘラミガキの方向が横方向のものが多い。口径17.8cm（106）、18.0cm（107）、19.3cm（108）。

A3類（109・110）A2類の凹線文が消えたものであるが、109のようなやや大型のものが存在

し、小型の 110では口縁部が内湾せず、外反してくる。口径36.1cm (109) , 17.4cm (110)。

A4類 (111) 口縁端部は拡張せず、口縁部と体部の境の屈曲部もないもので、口縁部付近は、痕跡的にナデやや内湾させている。体部外面はヘラミガキとし、やや丸味を帯びた底部もヘラミガキを施す。口径14.4cm, 器高 9.0cm。

B類 (112~124) 口縁端部が屈曲して拡張し、二重口縁となるもので、口縁及び体部の形態から 4 類に細分される。

B1類 (112~114, 118) 口縁端部の拡張が小さく、屈曲部をもつ体部は算盤玉状を呈するもので口縁部外表や体部屈曲部に回線文を施すもの (112~114) や体部屈曲部に板状工具による「ノ」の字状刺突文を施すものがある。内面ヘラケズリは体部下半まで、外側はヘラミガキ、ハケボをのこすナデとする。口径15.2cm (112), 16.6cm (113), 21.3cm (114), 18.7cm (118)。

B2類 (115~117) 口縁端部を上方へ大きく拡張し、体部はB1類同様算盤玉状に屈曲部をもつもの、115のように大型のものも存在する。体部の屈曲部付近には回線文その他の文様はない、口縁部外表には回線文を施すもの (117) と不明瞭な凹凸がめぐるだけのもの (115~116) がある。内面ヘラケズリは頸部直下まで及ぶもの (116) をはじめ概して体部上半に及ぶものが多い。外側のヘラミガキはB1類に比べて難になる。口径33.6cm (115), 17.3cm (116), 25.2cm (117)。

B3類 (119~123) 口縁端部を上方へ小さく拡張し、体部に屈曲部をもたないもので、小型で壺形土器に近い形態をとるもの (121, 122) もある。口縁部外表には回線文はなくすべて無文である。内面ヘラケズリは頸部直下まで及ぶものがほとんどで、外側ヘラミガキはB2類より一層難くなる。口径18.3cm (119), 28.0cm (120), 11.6cm (121), 10.4cm (122), 器高11.1cm (121), 11.8cm (122)。

B4類 (124) 口縁部にアクセントをもつミニチュア土器で、外側はヘラミガキとし他は指頭圧痕をのこすナデとする。口径4.5cm, 器高5.2cm。

高杯形土器杯部 (第24図125~136)

A類 (125~129) 口径15cm以下の小型のもので、形態的に 2 類に細分される。

A1類 (125・126) 口縁端部を横方向に拡張するもので、鉢形土器A1類と共通する。口縁部外表には回線文は施されず、杯部底面とは外方へ張り出す屈曲部で接続する。口縁部はナデ、杯部底面はヘラミガキを基本とする。口径14.2cm (125), 13.6cm (126)。

A2類 (127~129) 口縁端部を拡張せず、口縁部が外反して開くもので、口縁部外表無文のもの (127, 128) と回線文を施すもの (129) とがある。杯部底面は円盤充填による。他の特徴はA1類と同様である。口径11.1cm (127), 12.5cm (128), 13.0cm (129)。

B類 (130~136) 口径20cm以上の大型のもので、形態的に 3 類に細分される。

B1類 (130 ~ 132) 口縁端部がほとんど拡張せず、端面及び外表に回線文が存在しないもの

で、外表に若干段がつく。口縁部と杯部底面との接続部が外方へ張り出すものと、あまり張り出さないものがある。形態的にはA1類に類似する。口縁部はナデ、杯部底面はヘラミガキを基本とする。口径20.6cm(130), 23.8cm(131), 21.3cm(132)。

B2類(133,134) 口縁端部が横方向へ拡張し、端面に回線文を施すもので、口縁部の立上がりが内湾ぎみのもの(133)と外反ぎみに端面を大きく拡張するもの(134)がある。調整は他のものと同様であるが、ヘラミガキが丁寧である。口径25.8cm(133), 23.7cm(134)。

B3類(135,136) 口縁部が屈曲部から大きく外反して開くもので、口縁部端面に痕跡的な不明瞭な回線文を施す。口縁部の開きの大きなもの(136)と小さなもの(135)があり、前者では口縁部端面の回線文は一層痕跡的となる。口径22.5cm(135), 23.4cm(136)。

高杯形土器脚部(第25図137~141)

A類(137) 脚部に櫛描による文様を施すもので、脚端部を上方に拡張し、端面に不明瞭な回線文3条を施す。櫛描文は6条単位で5帯めぐらせ、最下部で縦に放射状に12帯施す。脚裾部上部には2個1対の穿孔を5対等間隔でめぐらせる。内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキとする。

B類(138,139) 脚部に回線文による文様を施すもので、脚端部は下方へ拡張し、端面に不明瞭な回線文を施す。139では脚裾部に4対の大きな穿孔をもち、回線文帶の上方に板状工具の刺突による絞杉文を2帯めぐらす。内面ヘラケズリ、外面ナデとする。

C類(140~141) 脚部無文で小型のもので、脚端部が下方へ拡張するもの(140)としないもの(141)がある。140では内面ヘラケズリは、裾部のみで他は成形時のしづり痕をのこす無調整である。141では、内面は成形時のしづり痕やしわをそのままのこし、外面はヘラミガキとする。器壁厚く、手づくね土器のようである。内底面は円盤充填によって成形している。

器台形土器(第25図142~144)

A類(142) 胸端部が平坦で柱状部の太いもので、外面に太い回線文を密に施す。内外面はナデとする。

B類(143) 胸端部を斜上方に拡張し、端部外表面に3条の回線文を施す。柱状部の外面には間隔をおいて明瞭な回線文を施す。また、透孔は四方に円形のものを2段に穿孔している。外面はハケ痕をのこすナデとし、内面はヘラミガキとする。

C類(144) 胸端部が大きく開いて拡張しないもので、低脚の高杯形土器の可能性もある。調整は風化著しく不明である。胎土に赤色土粒を含み器壁も薄く、他のものとはやや異った趣をもつ。

b. 鉄器

23号住居跡(SB23)(第26図145)

鎌(145) やや内湾する長い逆剣をもつ腰抉長三角形式ともいべき特異な鉄鎌で、鎌身の中央に幅0.5~0.6cm、長さ4.5~4.8cmの箆竹の木質がのこる。鎌身自体は箆竹装着部分の両面が凹んでおり、断面は中央が薄くなる。箆竹を固定する紐通孔は特に覆われて不明である。鎌身

の片面に集中して植物繊維状のものが付着しており、これらは住居跡床面に散かれていた草木類と思われる。長さ10.00cm、幅3.25cm、重量20.2g（現状）。

包含層（第26図146～148）

ノミ（146）断面矩形を呈する柱状片刃の鉄ノミで、刃部は使用によるものか丸くなっている。長さ7.90cm、幅0.95cm、刃部幅0.75cm、重量27.5g（現状）。

刀子（147）断面では背部も丸味を帯びた片側の鉄刀子で、刃部は薄く鋭い。基部は短かく幅が広い。目釘孔は鋒に覆われて不明。刀身が折れて腐棄されたものと考えられる。全長7.60cm（現存）、幅1.70cm（刃部）、1.40cm（基部）、重量14.5g（現状）。

刀（148）刀の基部の破片と思われるものであるが、目釘孔は確認できない。長さ6.20cm（現存）、幅2.10cm、重量21.2g（現状）。

C. 石器・土製品類

27b号建物跡（S B27b）（第27図155）

敲石（155）花崗岩の円礫の中央部分に集中的に敲打痕がのこる敲石で、側縁にも敲打痕がある。長さ9.70cm、幅7.60cm、重量510.0g。

包含層（第27図149～154・156）

石庖丁（149）扁平な自然石を利用した石庖丁で、背部に自然面をのこす。刃部は直刃で、著しい研磨のため刃部の角度は鈍い。刃部には横方向の研磨痕、身部には斜上方への使用痕が同時にのこる。両側縁に研磨による抉りをもち、中央背部付近に両面穿孔による1孔を有する。

孔の片面の周辺には、穿孔時の錐の痕跡が同心円状に明瞭にのこる。両側縁の抉りで使用したのち穿孔したことが考えられる。長さ9.35cm、幅3.25cm、重量46.7g。

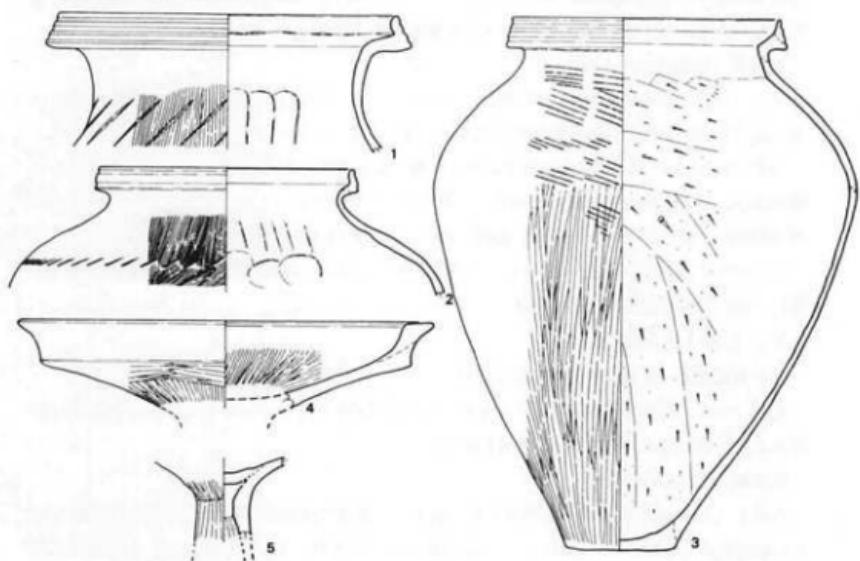
砥石（150～152）150は花崗岩を使用した粗砥で、側縁に自然面をのこすが研磨面はよく使用されている扁平な砥石である。重量112.8g。151は泥岩質の石材を使用した仕上砥で小型扁平な砥石である。重量50.6g。152は砂岩質の石材を使用した擦痕を有する砥石状の用途不明の石器である。糸巻状を呈する扁平な石材の片面中央部分に擦痕があり、側縁の3ヶ所に敲打痕があり、この部分が凹む。一種の砥石と考えたい。重量64.8g。

石製投擲器（153）花崗岩の円礫を使用した投擲器と考えられるもので、部分的に面取りを行っている。重量36.9g。

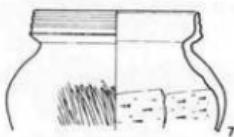
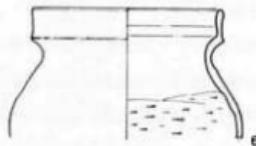
土製紡錘車（154）土器片を転用した紡錘車で、兩丸方形を呈する。穿孔は中央からややすれているが、両面穿孔である。片面に太いハケ目が明瞭にのこる。重量7.8g。

たたき石（156）砂岩質の円礫を使用した擦痕を有するたたき石で、断面卵倒形を呈する。側縁部分の一方に敲打痕があり、その部分から側面にかけて太い擦痕が走る。硬い植物繊維等を敲きつぶしたものであろうか。重量238.6g。

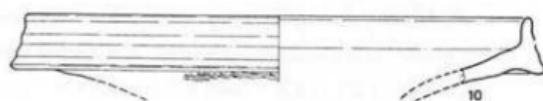
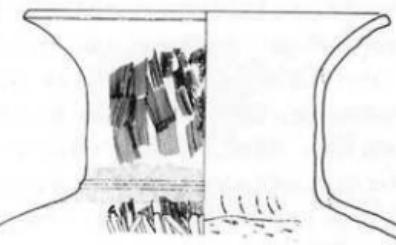
22号建物跡(SB 22)



23号住居跡(SB 23)



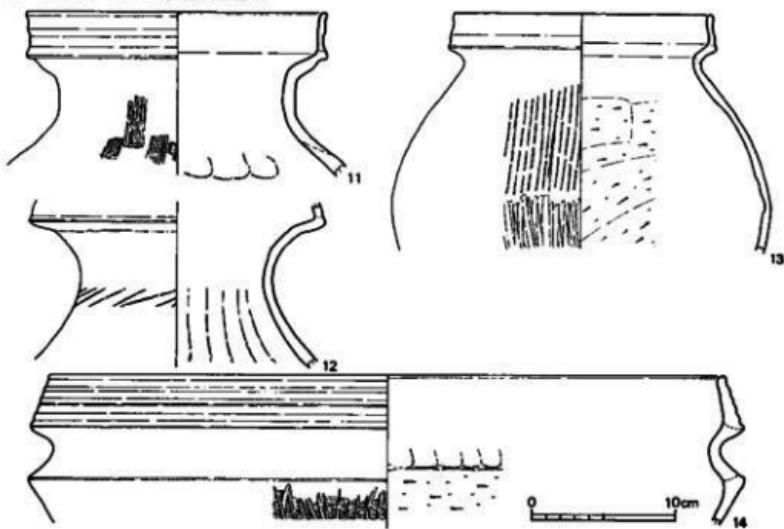
24号住居跡(SB 24)



0 10cm

第12図 22号建物跡, 23・24号住居跡(SB 22~24)出土土器実測図(灰色は丹塗部分)

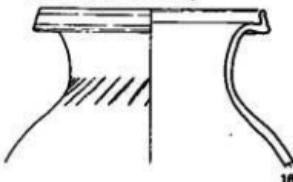
25号住居跡(SB 25)上層土器群



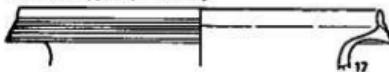
25号住居跡(SB 25)



28号住居跡(SB 28)

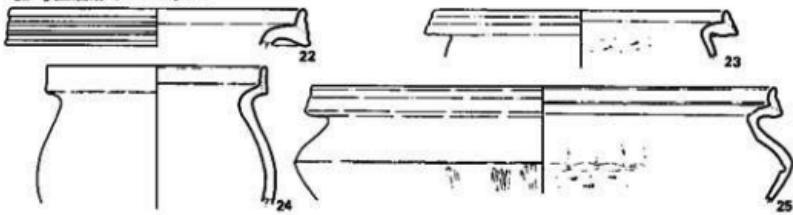


27b号建物跡(SB 27 b)

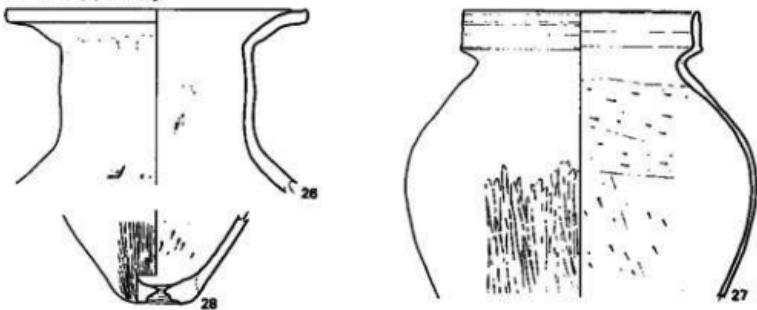


第13図 25, 28号住居跡, 27b号建物跡(SB 25・28・27 b)出土土器実測図(1:3)。(14は1:4)

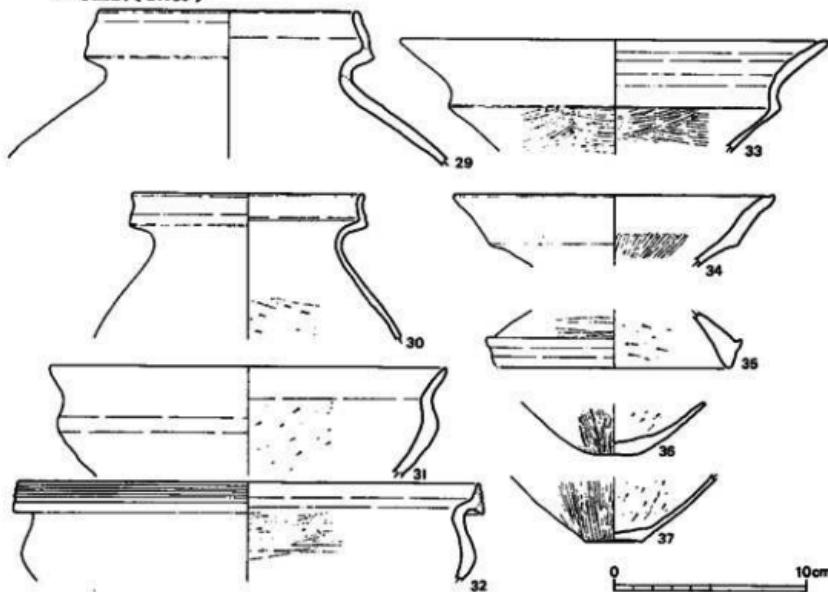
32号住居跡(SK32)PT



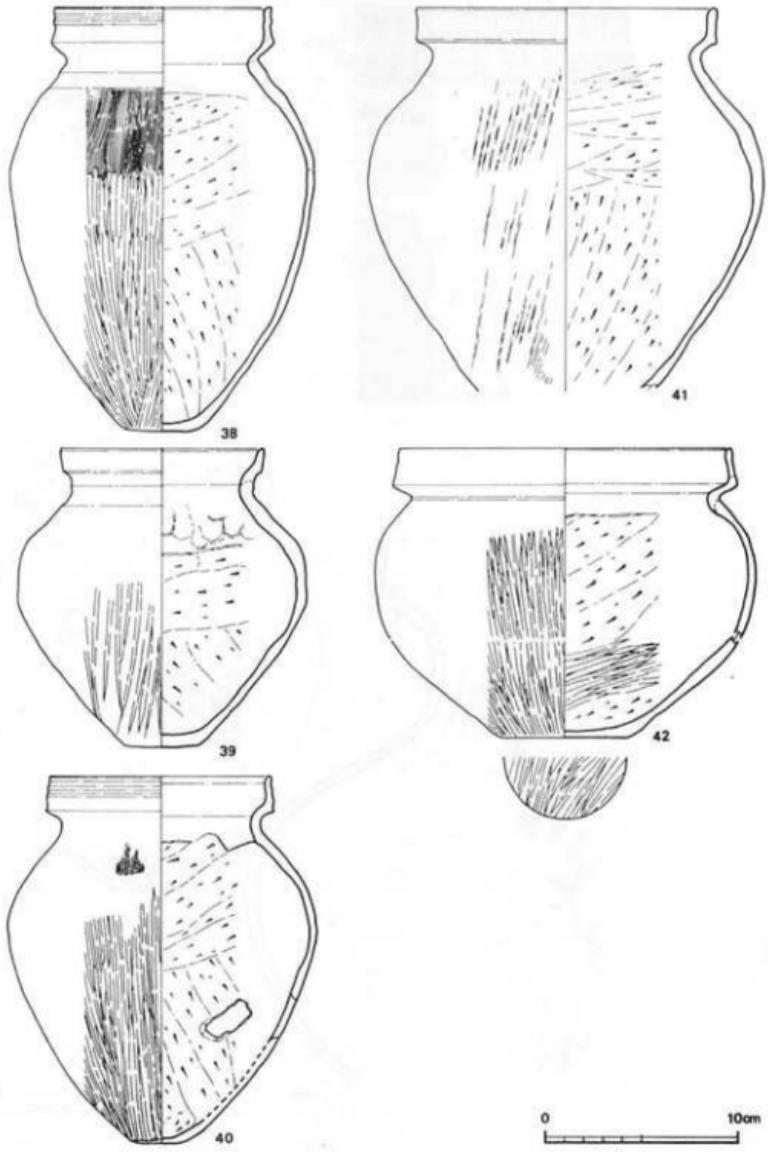
33号土壙(SK33)



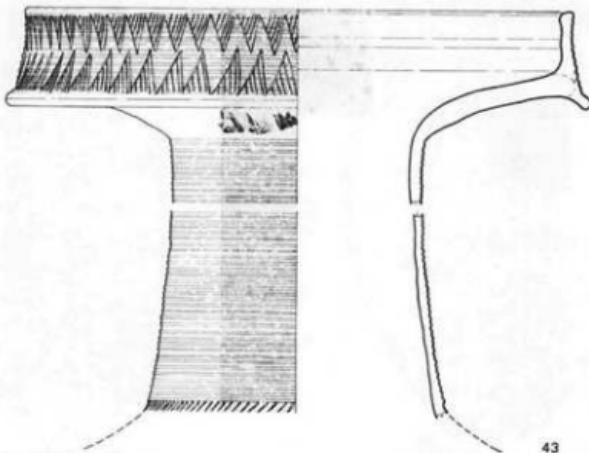
36号土壙(SK36)



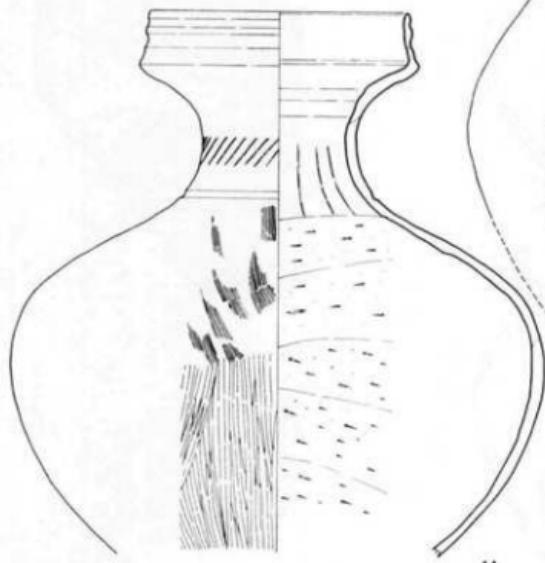
第14図 32号住居跡、33・36号土壙(SB32, SK33・36)出土土器実測図(1:3)



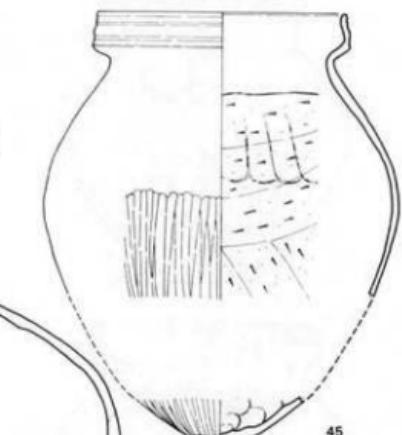
第15図 37号土器窯(SX37)出土土器実測図(1:3)



43



44

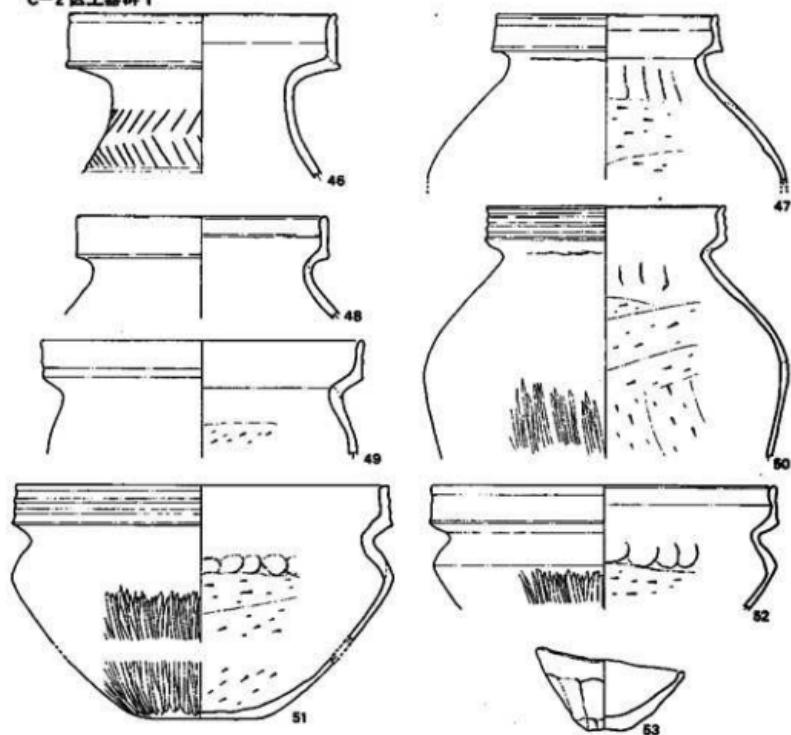


45

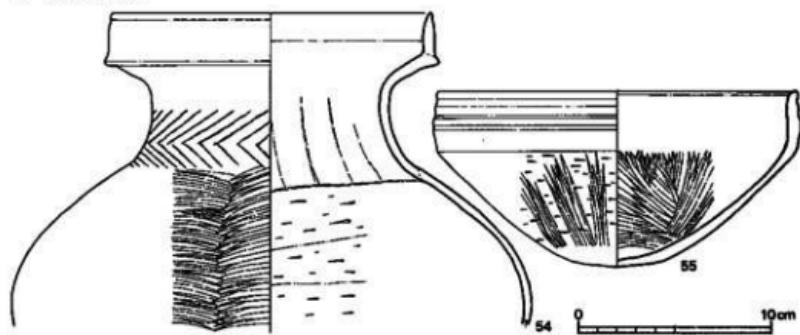


第16図 38号土器窯(SX38)出土土器実測図(灰色は丹塗部分)(1:3)

C-2区土器群1

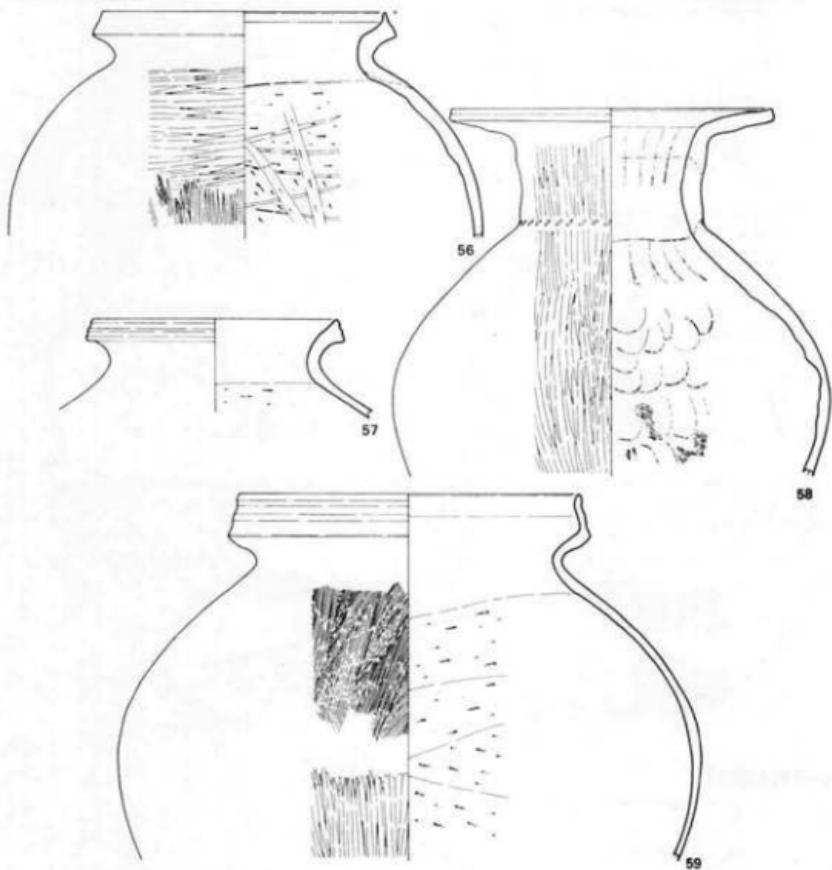


C-3区土器群1

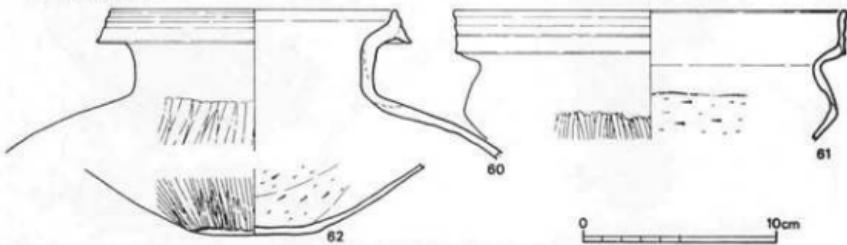


第17圖 C-2・3区土器群出土土器実測図(1:3)

C-3 区土器群 2



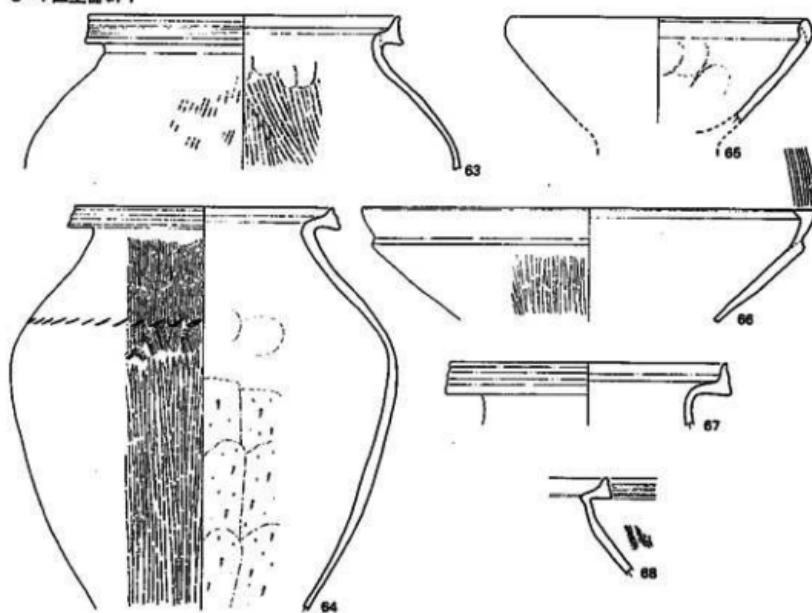
D-5 区土器群 1



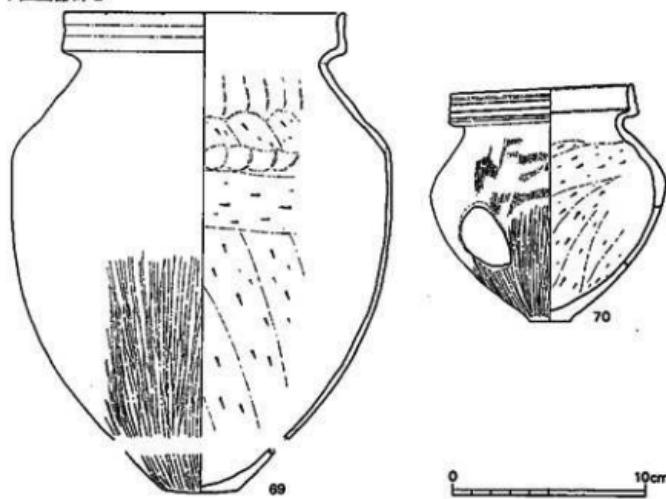
第18图 C-3, D-5区土器群出土土器实测图(1:3)

0 10cm

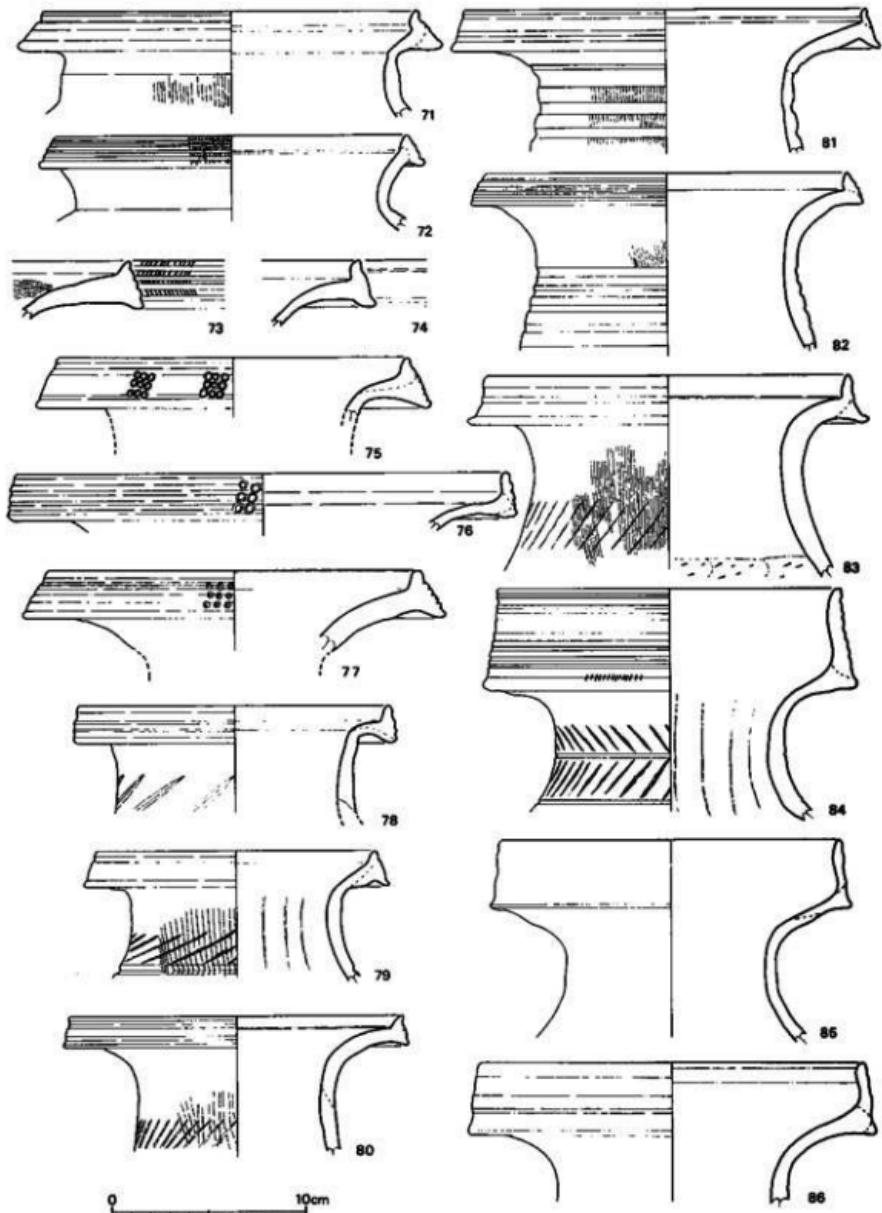
C-4 区土器群 1



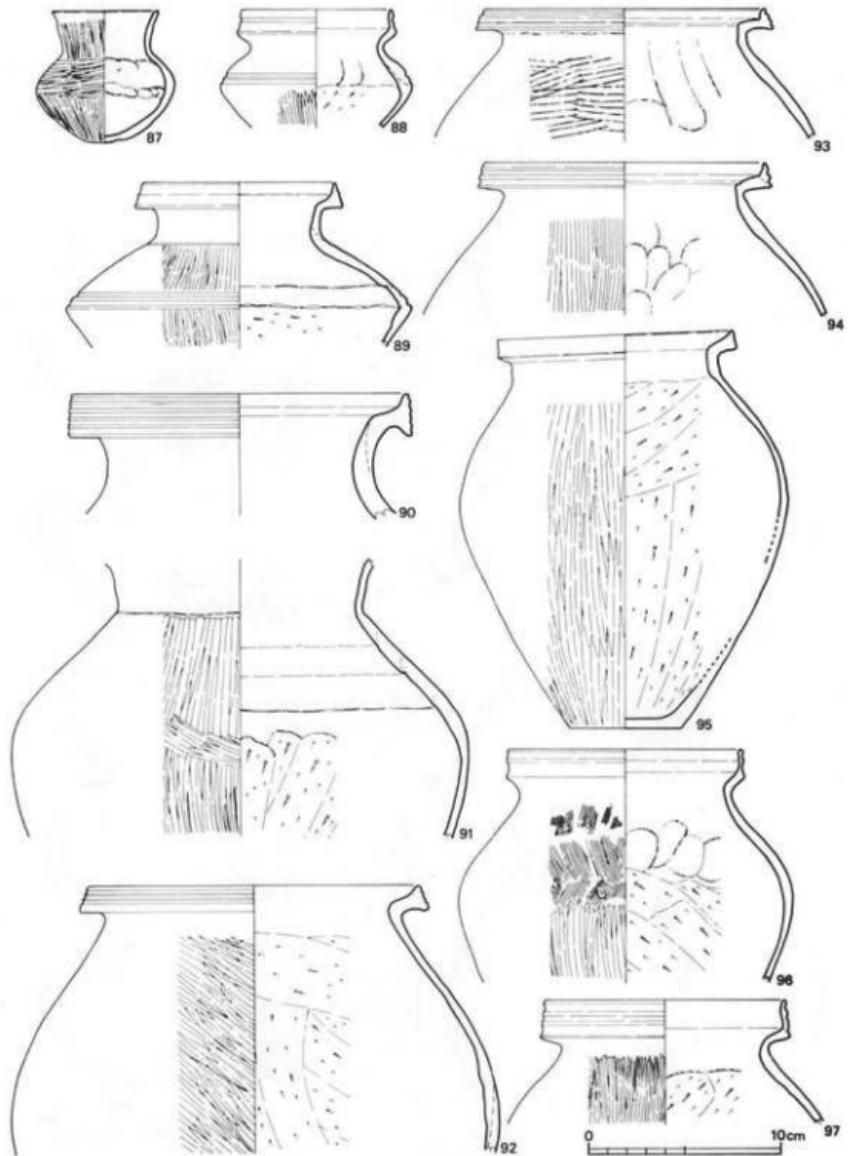
C-4 区土器群 2



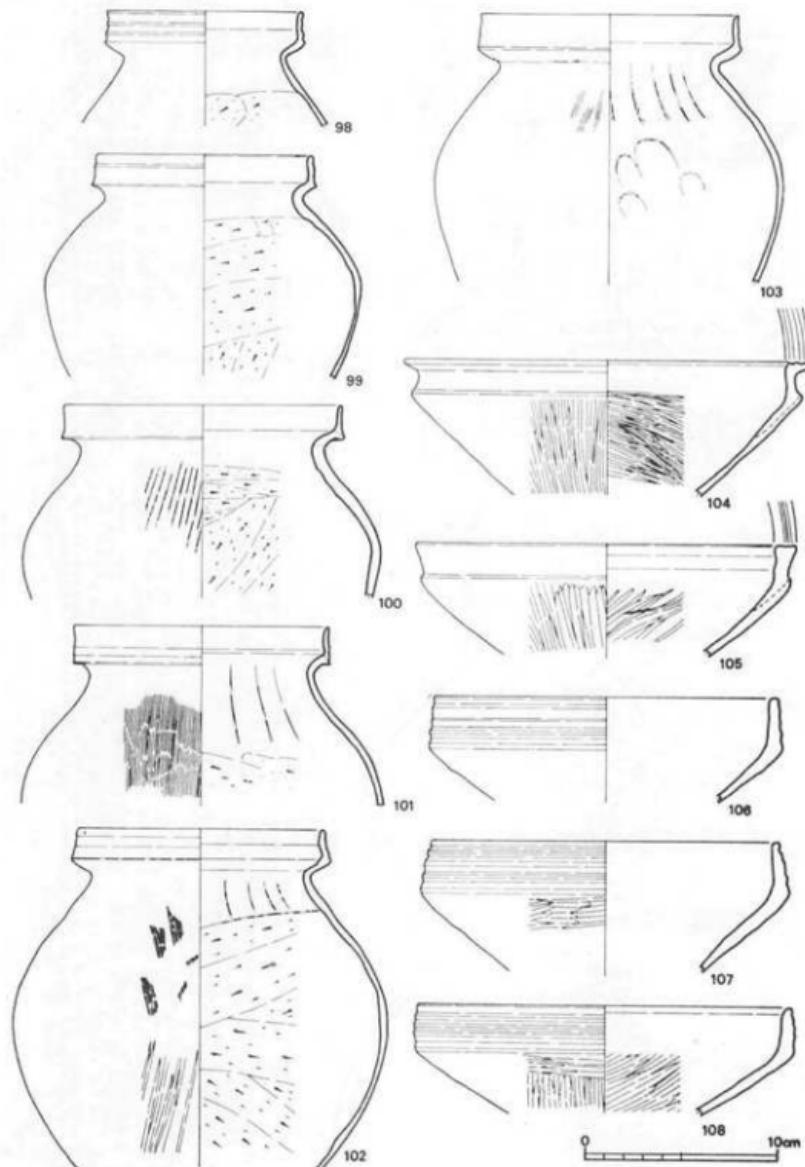
第19図 C-4区土器群出土土器実測図(1:3)



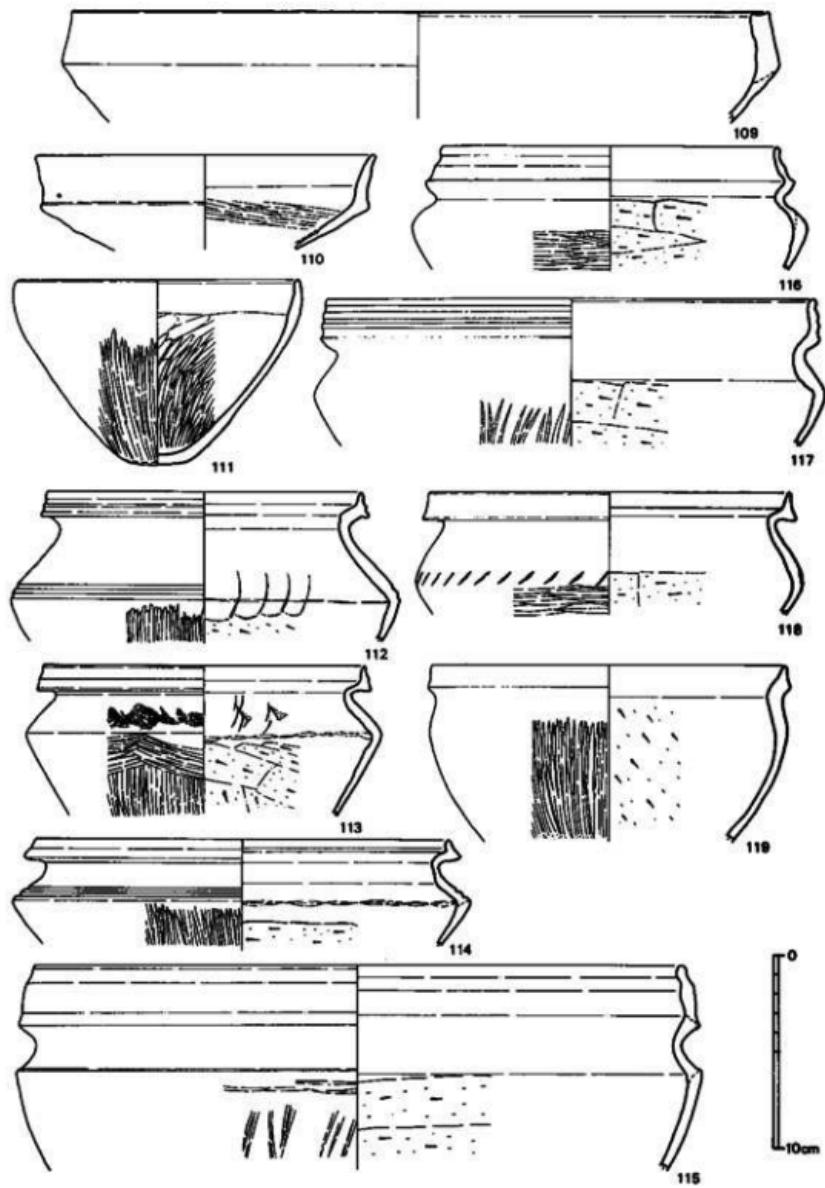
第20圖 包含層出土土器実測図1 (1 : 3)



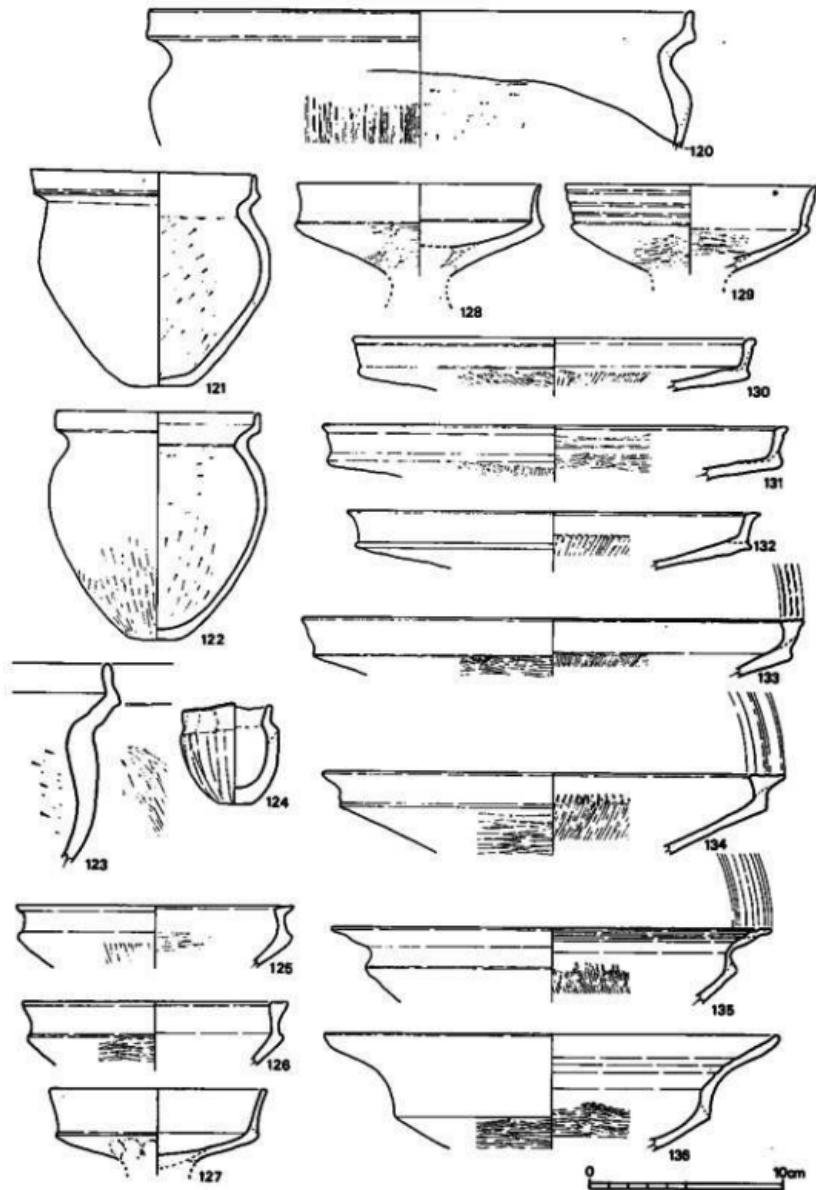
第21図 包含層出土土器実測図2(1:3)



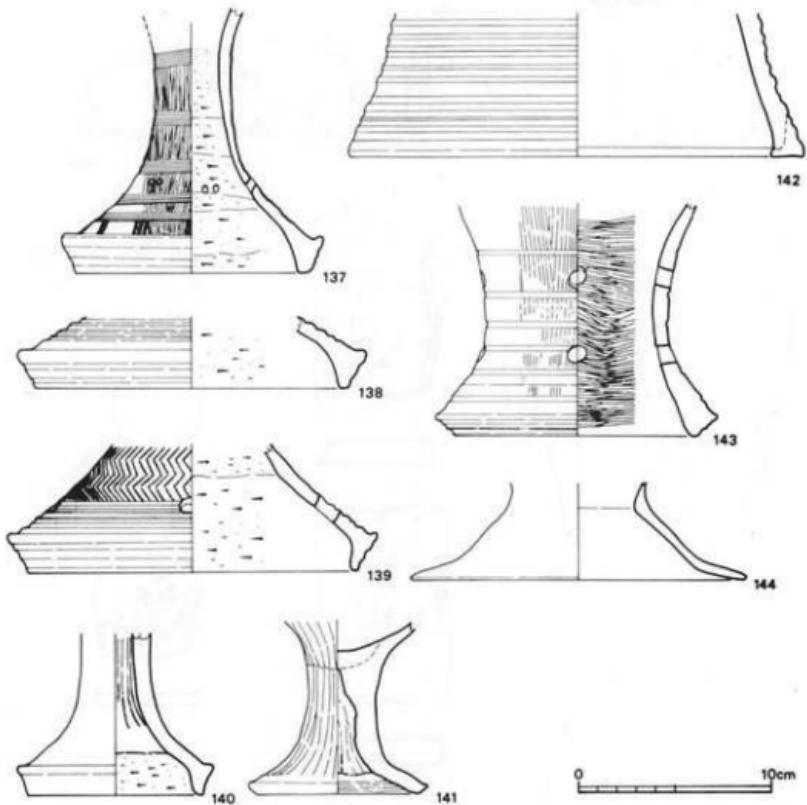
第22圖 包含層出土土器実測図3 (1 : 3)



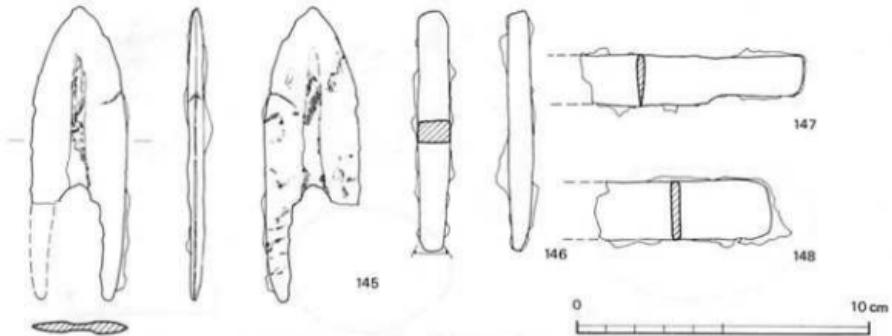
第23図 包含層出土土器実測図4(1:3)



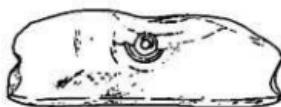
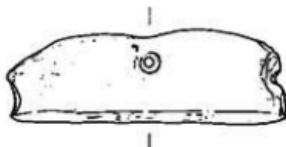
第24図 包含層出土土器実測図5 (1:3)



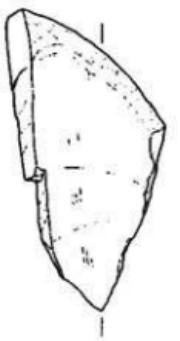
第25図 包含層出土土器実測図6(1:3)



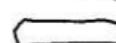
第26図 出土弥生時代鉄器実測図(1:2)



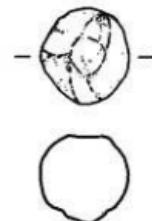
149



150



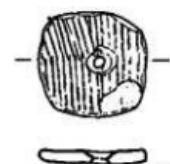
151



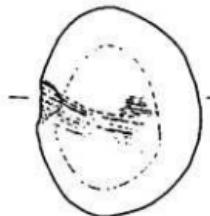
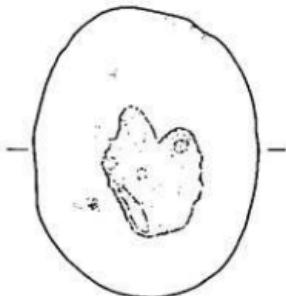
153



152



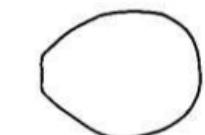
154



156



155



第27圖 出土石器、土製品実測図(1:2)

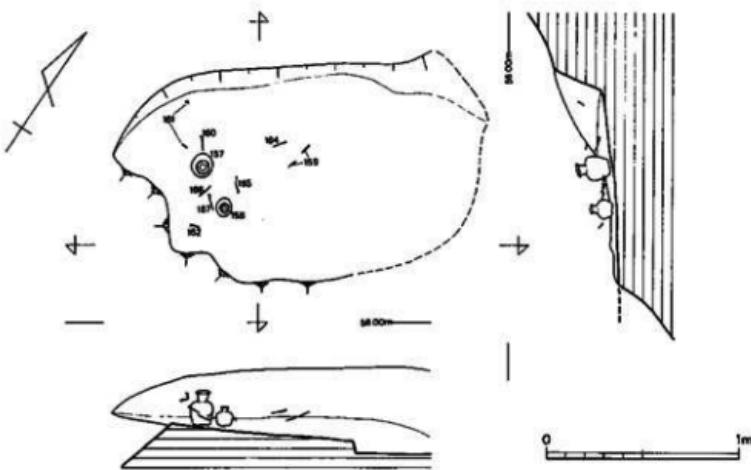
3, その他の遺構と遺物

30号不明遺構 (SX30) (第28図・図版10a)

B-3区中央に単独で存在する遺構で地山を削り出して平坦面を形成し、この平坦面上から須恵器2個が据えた状態で出土した。また、この須恵器の周辺からは鉄刀子1、釘10本分が出土し須恵器が本来木櫃等に納めて埋納されたものと推定される。この平坦面の規模は、北東側が削平されて不明であるが、現存幅1.05m、長さ1.40~1.50m、壁高0.20~0.25mである。須恵器の出土状態や木櫃の存在が推定されることなどから、この遺構は須恵器の中に火葬骨を納めた墳墓である可能性が強いが、須恵器の中からは骨片は検出できなかった。ただ、推定される木櫃の大きさに比べて、釘が大きいことが奇異である。副葬品と考えられる鉄刀子には布が明瞭に付着しており、副葬に際して布にくるんで埋納されたことが考えられる。

出土遺物 (第31図157~169)

須恵器 (157・158) 157は広口の壺で口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや外反ぎみにわずかに拡張する。丸味をもった胴部に安定感のある底部がつく。胴部内外面には成形時のロクロによる粘土紐巻き上げ痕が明瞭にのこる。また頸部内面には口縁部接合時の痕跡が溝状にのこる。部分的に艶のある灰黒色を呈し焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。口径8.8cm、胴部最大径12.3cm、器高15.3cm。158はいわゆる小口壺で、口縁部は小さく短かく外反し、若干段のつく頸部から胴部最大径までは直線的に張り出し、下半は丸味を帯びて安定した平底につづく。底部はヘラ切離で、胴部下半底部付近は回転ヘラケズリとする。口径4.3cm、胴部最大径10.5cm、器高9.15cm。



第28図 30号不明遺構 (SX30) 実測図 (番号は遺物番号と一致する) (1:30)

鉄刀子（159），両刃造の刀子で，茎部が異常に長い。肉厚であるが細身の刀子である。刃部の半以上を欠く。刀子全体に麻と考えられる布が付着しており、布に包んで埋められたものである。現存長9.6cm, (刃部長3.0cm, 茎部長5.6cm), 幅1.1cm (刃部), 0.7cm (茎部)。

鉄釘（160～169）すべて折頭形の釘で、全面に木質が付着する。木質から推定される板材の厚さは約2cmである。

34号石組遺構（S X34）（第29図）

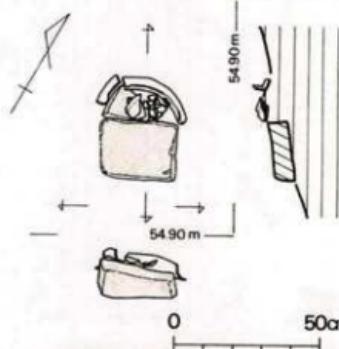
（図版11b）

A-3区で検出した角礫の集石遺構で、斜面に位置するため、南側の石2個がややずれているが、本来は方形に組まれていたと考えられる。復元すれば、東西0.6m, 南北0.5m程度になると思われる。

石の間隙及び下部から鉄釘が出土しており、本来石組の下部に木質が埋納されていたことが推定され、墳墓の可能性が高い。石組の下部からは鉄釘以外の遺物、土壤などの遺構は全く検出できなかった。30号不明遺構（S X30）と同時代のものであろうか。

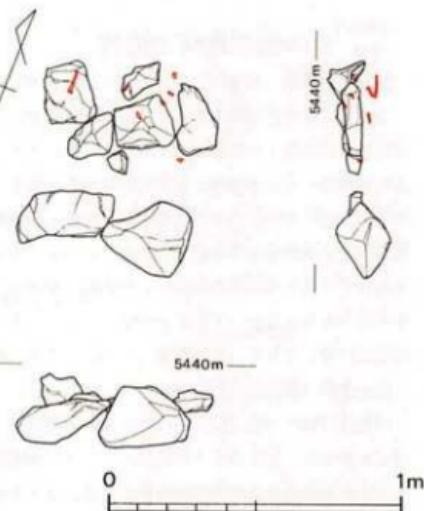
35号不明遺構（S X35）（第30図）

34号石組遺構（S X34）の西方約3.5mの斜面で検出した遺構で、方形の板状の石を掘え、さらにその斜面上方に三角形の石と須恵器の蓋（杯）を囲むように土師器の壺の口縁部を倒立させている。何らかの埋葬施設又は祭遺構と思われるが本来の構築意図は不明である。



第30図 35号不明遺構（S X35）
実測図（1:25）

第29図 34号石組遺構（S X34）
実測図（1:25）（赤は釘）



出土遺物（第31図 170・171）

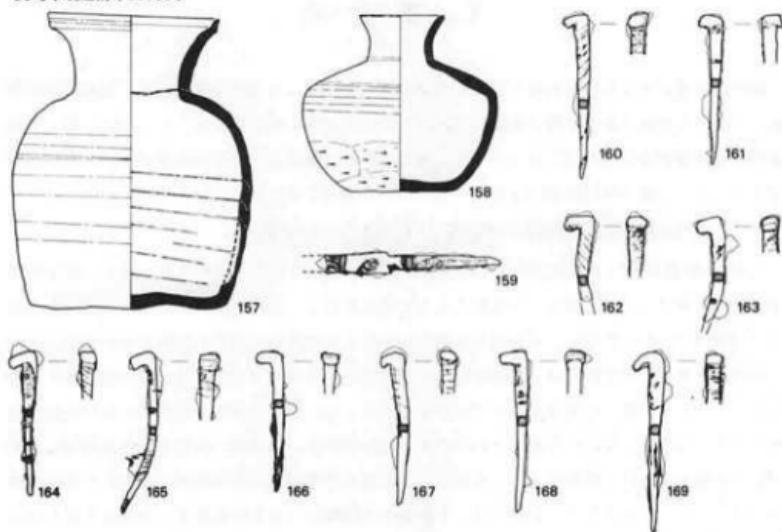
土師器（170）口縁部は「く」の字状に外反する長胴の壺である。外面にハケ目、口縁部内面に横方向のハケ痕をのこす。他はナデとする。口径32.5cm。

須恵器（171）器形がやや歪んだ蓋又は杯で、全面ナデとし、底部もヘラ切離の後ナデしている。内底面は中央部が凹んでいる。口径13.3cm、器高3.9cm。

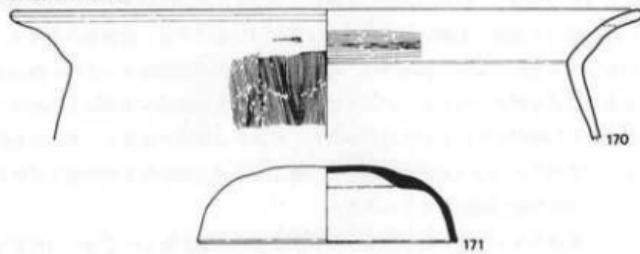
包含層出土遺物（第31図172～179）

各調査区から須恵器、鉄銭（178）、鉄釘が出土した。

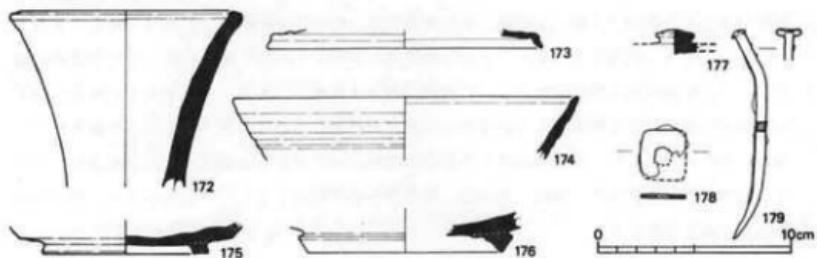
30号不明遺構 (SX 30)



35号不明遺構 (SX 35)



包含層



第31図 古墳時代以降の出土遺物の実測図 (1 : 3)

V まとめ

昭和55年度以降4年次にわたり、県営農地開発事業に伴って調査を実施した石鎚権現遺跡群も、第1号古墳及びE、F地点を除いてかなりの内容が明らかとなった。ここでは、E・F地点の試掘調査の成果も加味しながら、石鎚権現遺跡群の構成とC地点の位置づけ、及び備後南部地方における弥生時代後期の土器編年等について考えてみたい。

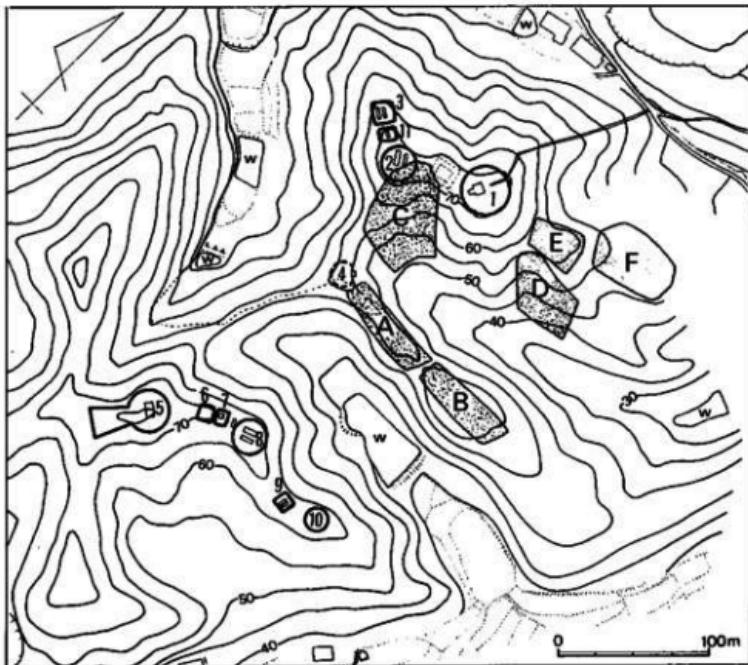
1. 石鎚権現遺跡群の構成とC地点の意義

石鎚権現遺跡群は、5世紀代を中心とする11基（内、1基は不明瞭）の古墳と、弥生時代中期後半～末にはじまる集落、墳墓群によって構成される。古墳群については、前回報告で若干の位置づけを行ったので、今回はC地点を中心とした弥生時代関係の遺構について若干考えてみたい。まず、地形的には、本遺跡群は芦田川南岸、今岡西谷の中央付近の西側丘陵を西方にえぐり込んだ細長い小支谷を囲んで存在する。ここは、標高50～75mの起伏をもつ丘陵尾根及び斜面からなり、周辺の谷水田との比高30～55mである。遺跡群の内容を便宜上設定したA～Fの6地点に分けて概略すると、A地点は、中期末を中心とする住居跡、貯蔵穴、及び後期中～後半の豊穴等からなる。B地点は、十数基の土壙墓からなる墳墓群で、時期は土器を伴っておらず限定できない。C地点は、遺構分布にかなり比高差があり、最高所の丘陵尾根上に後期前半の貯蔵穴群が集中し、後期中頃の住居跡は、丘陵尾根上及び斜面上半に分布する。斜面下半には後期後半の土器窪、土壙、廃棄された土器片等が集中する。遺跡群の中では、最も遺構、遺物の集中する地区である。D地点は、丘陵斜面上半から住居跡4～5軒を検出したのみである。E地点は試掘調査のみであるが、その成果からは後期前半～中頃の土器を伴う土壙墓群で、地形的に尾根が平坦に拡がり墳墓を営むには恰好の位置であろう。F地点も試掘調査のみであるが、E地点からつづく丘陵尾根上で、後期前半の土器を伴う円形竪穴式住居跡を検出しており、この時期の居住地区と思われる。

以上のような概要をふまえて、昨年度及び今年度調査の対象となったC地点の内容をやや詳しくみてみることにする。C地点の遺構の内訳は、貯蔵穴と考えられる土壙、及びそれ以外の用途が考えられる浅い土壙、土壙墓、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土器窪等である。また、これらの遺構は、次項で述べる出土土器の編年観から大きく三期に分けられ、それぞれの時期によって石鎚権現遺跡群全体の中で、C地点の占める役割が変化しているようである。以下に時期別に遺構内容を概略し、それぞれの時期におけるC地点の位置づけを行っておきたい。なお、各時期を通じて、丘陵最高所の第2号古墳が存在する部分は遺構が空白となるが、ここは、地形的にみて見張り、祭祀、集会等、集落共有の「場所」としての機能をはたしていたのではないかと思われる。

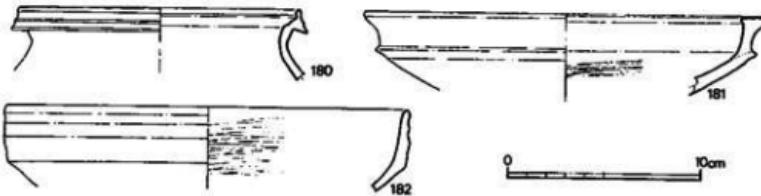
I 期

後期前半を中心とする時期で、遺構は丘陵尾根上に集中する貯蔵穴群（SK 1・10~15・17~20）及び斜面に立地する掘立柱建物（SB22・27a・27b）が中心となる。他にこの時期の土器を明らかに伴ったものとして9号ピット（SP9）の他、8号土墳墓（SK8）も単独ではあるがこの時期に含まれる可能性が高い。ここで問題となるのは、貯蔵穴群との関連で掘立柱建物がどのような役割をもった建物であったかであろう。弥生時代の掘立柱建物は、近年その例数を増加させつつある。掘立柱建物自体は、高知県田村遺跡群例が示すように弥生時代の初期から存在するようであるが、中期以降、一般的に穀倉として普及する高床の建物に発展するものと、鳥取県青木遺跡で作業場・納屋・住居と考えられた土間床に近い床をもつ建物として発展するものがあるようである。特殊例としては、岡山県百間川今谷遺跡で示された特殊な技術集団とかかわる高床の住居とされたものがあるが、高床の住居が一般化するのは古墳時代以降になってからであろう。このような認識のもとに、C地点の3つの掘立柱建物を考えた場合、これらは、比較的広い削平面をもち、削平面上に炉跡状の焼土面や炭化物は存在せず住居の床面として機能した痕跡がなく、 2×1 間の柱穴プランの四隅の柱穴規模（直径0.4~0.5



第32図 地点分布図 (1 : 3500)

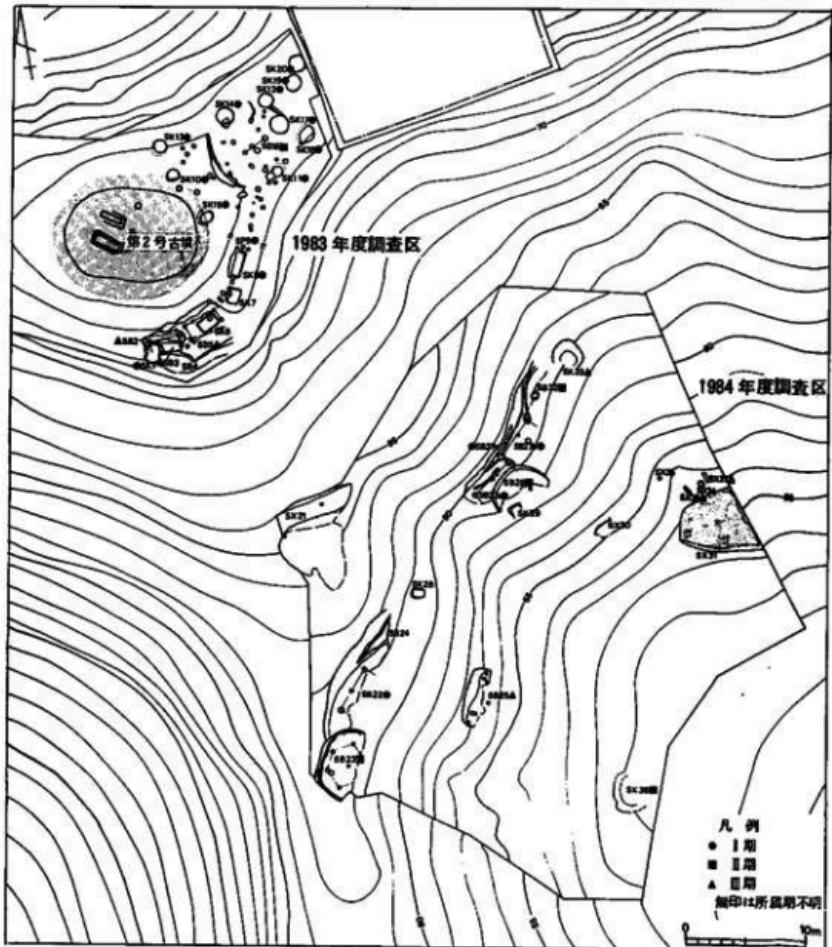
m, 深さ0.4~0.7m) も通常の住居跡の柱穴掘方に比べて大きい。また、明らかに1つの建物の建替えと考えられる27a号建物(SB27a)と27b号建物(SB27b)が22号建物(SB22)とは、それぞれ独立した建物となっていることなどから、高床の倉庫状建物と推定できる。この推定は、出土土器及び遺構の重複関係から次時期(Ⅰ期)と考えられる住居跡(SB23・28・32)がすべて円形竪穴式住居となっており、Ⅰ期とⅡ期の間に住居構造の急激な変化を想定することは非現実的であることからも妥当なものと考えられる。結論的に言えば、Ⅰ期のC地点には、貯蔵穴と高床倉庫という異なる形態の貯蔵施設が集中し、住居が存在しないことになる。C地点に貯蔵施設を営んだ集団の居住地を付近に求めれば、試掘調査によってⅠ期に該当する土器(第33図)を伴う円形竪穴式住居跡2軒を検出したF地点である可能性が高い。F地点は標高40~50m、谷水田との比高20~30mの丘陵尾根の比較的低い部分に位置しており、C地点よりは水稻耕作を行う集落立地としては優位であり、遺跡群の中ではA地点(標高50~60m)と並んで最も早く集落が営まれた地点と考えられる。さらに、このF地点とC地点の中間部の丘陵尾根上のE地点ではⅠ期の高杯形土器(第33図)を伴う土壌墓群が検出されており、少なくともⅠ期のある時点では、F地点—集落、E地点—墳墓群、C地点—貯蔵庫群という比較的整然とした土地利用形態が存在したことが想定される(第32図ではC地点とE地点がやや離れているが、調査上の制約から、本来C地点尾根上の貯蔵穴群は第1号古墳が存在する付近まで拡がっているものと考えられる)。以上のように、Ⅰ期のC地点はF地点に居住した集団の貯蔵施設群と想定したが、これら貯蔵施設群は出土土器による時期決定の限界性から、すべて同時併存したとは考えられない。しかし、位置的に近接しすぎる19号土壙(SK19)と20号土壙(SK20)や明らかに建替えと考えられる27a号建物(SB27a)と27b号建物(SB27b)を除けば、貯蔵穴の重複はなくまた高床倉庫状の建物も小さな谷を隔てて約20m程度の距離がある。立地的にも、貯蔵穴群は風通しがよく水はけのよい丘陵尾根上に、建物はやや風圧を考慮したものか丘陵斜面に設けられており、これらの構築は比較的短期間に統制のとれた集団によってなされたことが窺える。また、居住地区から切離された地点に貯蔵施設群が集中して営まれるという在り方は、これらを構築した集団による穀物(食料)の集中管理がなされたことが考えられる。同様な指摘が岡山県奥坂遺跡でもなされているが、この場合は居住地区内における貯蔵穴の集中であり、本遺跡群C地点とはやや様相を異にする。出現時期も後期後半でありやや時期的にもずれがある。他に後期の貯蔵穴が群集する例として、岡山



第33図 E, F地点出土土器実測図(1:3)(180:F地点, 181・182:E地点)

県北部の大田十二社遺跡があるが、これも貯蔵穴群と居住地区の明確な区別はない。本遺跡群C地点の場合は現象的には、北部九州から西部瀬戸内にかけて弥生時代前期～中期前半に盛行する丘陵上に貯蔵穴のみ群集する在り方と一脈を通じるものがあるが、どのような経緯で後期前半の中部瀬戸内の遺跡に出現してくるのか、穀物（食料）の集團管理を強めなければならぬ社会的背景があったものか、単にこの遺跡群の特殊事情であったのかは、類例に乏しく今後の検討を要する。

次に、廃絶時に投棄された土器等から同時併存を考えた貯蔵穴と高床の倉庫状建物の機能の

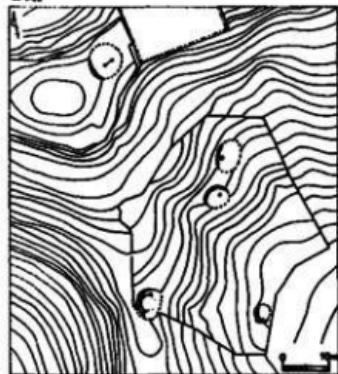


第34図 遺構時期区分図(1:500)

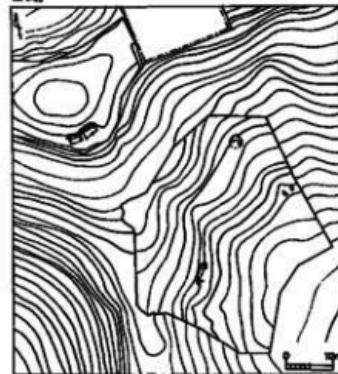
I期



II期



III期



第35図 遺構変遷図(1:1,250)

違いつつは、積極的にこれを論証することはできないが、両者ともF地点に居住する共同体の管理下におかれていたことから考えて、貯蔵物の使用目的が異なっていたのではないかと推定される。すなわち、貯蔵穴には共同体員のそれを養う日々の穀物（食料）を高床の倉庫状建物には、共同体それ自体を維持する糧糧、共用の労働用具（鉄器、その他）備備用の穀物（食料）、祭祀用具等を貯蔵していたと考えるのが妥当ではないかと思われる。また、22号建物跡（SB22）では、柱の抜取後に柱穴掘方に土器を投棄しており、岡山県沼田遺跡・東蘇坊遺跡で指摘されたような高床倉庫の廃絶（移転）に際して、土器を伴う祭祀が行われたことが想定される。

Ⅰ期

Ⅰ期につづく後期中頃と考えた時期で、C地点の遺構は円形竪穴住居跡4軒（SB16・23・28・32）を中心となる。他に土器痕状の浅い皿状の土壙（SK36）がある。竪穴式住居跡はすべて、Ⅰ期の貯蔵施設と重なる形で占地しており、この時期にC地点の遺跡群全体に占める役割が一変している。すなわち、貯蔵施設群（Ⅰ期）→居住地区（Ⅱ期）という変換が認められる。Ⅱ期の住居跡がⅠ期の貯蔵施設群と見事に重複している事実は、住居立地に対する地形的制約とともに、すでにⅠ期に貯蔵施設群立地のための造成がなされており、新らな伐開や造成が容易であったことが考えられ、これら一連の構築物が同一集団によってなされたことは想像にかたくない。住居の配置は、丘陵尾根上に直径7.4mの二本柱のやや大型の住居跡、丘陵斜面に直径5m前後の中型住居跡が並ぶ。これらは28号住居跡（SB28）と32号住居跡（SB32）が接近しすぎている以外は、相互に20~30m以上離れて存在しており、居住スペース及び防火管理の面からも同時併存が可能な理想的な配置をとる。28号住居跡（SB28）と32号住居跡（SB32）の関係については、双方とも遺

存状態が悪く、柱穴の配置等は不明であるが、28号住居跡（SB28）は斜面を大きく削平して造成しているものの壁体溝は掘られておらず、柱穴も明瞭なものがなく床面上からの遺物も極めて少なく、埋土下層にも遺物や炭化物等夾雜物がほとんど含まれていない。このことから、28号住居跡（SB28）は構築途上で放棄されたか、居住期間が極めて短かかったことが考えられ、32号住居跡（SB32）の建替えの可能性が高い。よって調査区内に限定すれば、C地点Ⅰ期の住居跡は同時併存したものは最高3軒ということになる。これら住居跡の出現の背景として、Ⅰ期の居住地区F地点の人口増による集落の拡大と考えるのが妥当であろう。ここで問題となるのは、拡大した居住地によって漬された共同体管理の貯蔵施設群であろう。これらが、さらに地点を移して新たに設られた可能性は否定できないが、むしろ、C地点のⅠ期の貯蔵施設群のすべてがほとんど同時に廃絶されていることを重視すれば、集落全体の穀物その他の貯蔵形態に異変が生じたことを想定した方が妥当であろう。さて大きな住居跡ではない23号住居跡（SB23）から、極めて大型の鉄鍛（第26図145）を出土していることなどから考えて、Ⅰ期には共同体によるこれらの集中管理を行うという規制が、Ⅱ期には崩壊し、住居それぞれが消費の最小単位として自立しつつ労働・社会生活の最小単位をなした共同体を維持するという方向に進んだことが考えられる。このことを現象的にとらえれば、Ⅰ期には共同体によって集中管理（共同管理）されていた貯蔵穴や高床倉庫が、Ⅱ期には共同体内のそれぞれの住居あるいは2～3軒の住居群の中に吸収・消化されたたるものと考えられる。これらⅡ期の自立した住居・住居群を営んだ家族の中から、のちの共同体首長に発展するような有力家族が抬頭していくことは想像にかたくない。これらのことと、本遺跡群のみの社会発展過程であるのか、周辺地域を含めた普遍的事象であるのが今後の検証を要するが、高倉洋彰氏がかって指摘した弥生時代の労働編成の在り方の変遷とよく合致するようである。いずれにしてとも、本遺跡群においては、後期中頃（Ⅱ期）に共同体内部の規制に大きな変容があったことは事実であろう。

Ⅲ 期

後期後半と考えた時期で、この時期のC地点の遺構はこれまでの立地と異なり、丘陵の急斜面に立地するものがほとんどで、Ⅰ・Ⅱ期の遺構との重複はほとんどない。この時期の出土土器量に比べて遺構は不明瞭なものが多く、規模、数量とも縮小する。主な遺構は、住居跡・住居状遺構（SB2・3・5・25）、土壤（SK33）、土器窪（SX37・38）等がある。住居跡は急斜面を削平して平坦面をつくりだしたものばかりで、急斜面に立地するためか、柱穴配置が2号住居跡（SB22）では4本の、5号住居跡（SB5）では6本の長條の配置となる。またこれと関連して、地山の削平プランも直線的となり、竪穴式住居としては隅丸方形を指向してくるようである。このことから、Ⅱ期とⅢ期の境に竪穴式住居の平面プランが円形から方形を指向してくる変換期を求めることができる。また、床面に壁体溝のあるもの（SB25）などいもの（SB2・3・5）が存在するなど、柱穴配置とともにこの時期の住居にはバラエティがあるが、ほとんどの住居が恒常的居住を認めがたい程、変則的かつ貧弱なものが多く、

当地域の普遍的な住居と考えることはできない。また、このことはこの時期の住居跡が同一地点に、あるいは近接した地点に数次にわたって建替えられている事実からも、その仮小屋的性格が如実に示されているようである。これらの住居跡から考えられることは、後期後半に至っても山間の生活から抜け出得なかった集団の集落か、あるいは平野部に下降した母集団の見張り小屋的性格をもったものか、祭祀その他に係わって季節的、一時的に使用される建物であったものか、想像の域を出ない。3号住居状遺構（SB3）に一括投棄された土器群や37・38号土器窯（SX37・38）にみられる岡山方向から搬入されたとみられる丹塗大型壺形土器を含む完形土器群等からは、祭祀的雰囲気が感じられるが、この時期のC地点の実態は不明と言わざるを得ない。いずれにしても、Ⅰ期・Ⅱ期と拡大をつづけた遺跡群が、Ⅲ期を境に縮小し古墳時代の集落へ統かない事実のみを確認しておこう。

2. 出土土器の編年について

石錐現遺跡群C地点の調査では、一部中期末に比定される土器を含んで後期全般の土器が出土した。当地方（備後南部）の後期の土器編年は、古く神谷川式として設定されて以後、発掘調査の進展、資料の増加に伴ってその細分の必要性が指摘されているが良好な一括資料等を欠くため、後期全般を含むといわれている神谷川式の変遷の実態を解明するまでには到っていない。ここでは、実態の不明瞭な神谷川式土器の基礎資料を提示する意味で、本遺跡群C地点出土土器の編年的位置づけについて考察を加えることとする。この編年作業にあたっては、後期土器の編年研究が著しい進展をとげつつある岡山県南部の土器編年⁽¹⁸⁾、特に高梁川以西の土器等との併行関係を考えながら、本遺跡群C地点出土土器の中で、使用の同時性が考えられる一括遺物を中心に編年組列を考え、大きく三期に区分した。また、一部に包含層からまとまって出土した土器や、周辺遺跡出土の一括遺物も適宜使用し、器種の欠落を補った。中期末と後期初頭の土器の差異については、器種構成や形態、製作技法等からは明瞭な差異は把み難く、その変化が漸移的なものであったことが考えられる。何をもって中期の終焉と考え、後期のはじまりと考えるかは、集落構成や生産用具等の変革による社会発展段階の契機の問題とからむ時期区分の問題であり、ここではふれないこととし、一応、從来当地方で中期末とされた土器群及び本遺跡群C地点包含層中から比較的まとまって出土したこの時期の土器群を0期として、その漸移的变化を明示しておきたい。なお、編年図作成にあたっては、各期の中をさらに、一括遺物ごとに主に壺形土器の口縁形態等を基準として段階的に並べ、形態的発展過程の解明を試み、今後の検討に備えた。しかし、この変化は、他の器種では変化が認められなかったり、あるいは逆転しているとみた方がよい場合もあり、時期差と考えるよりむしろほぼ同時期の個体差に起因するものも多いと考えられる。多様な土器の形態による時期設定の限界として、現状では後期を大きく三時期にしか細分できないことを再確認して、今後の検討課題とし、以下に各期の形態的特徴・併行関係等について述べることにする。

0 期（中期末）

従来、周辺地域で中期末に比定された土器には、池ノ内遺跡3号住居跡、長迫遺跡1号住居跡、石鈴塚現遺跡群A地点4号住居跡、吹越遺跡2号土壙出土の土器がある。これらの特徴を概略すれば、壺形土器では、肩が張る器形は後期の器形に近似するが、頸部は短かく、小さく拡張する口縁端部には明瞭な回線文を施す。形態的变化は、これに先行すると思われる松永溝周辺の長波遺跡S-B50出土壺形土器等からスムーズにたどれる。このことから、胴部最大径が上半に上がり、肩が張る後期的形態の壺形土器はこの時期に成立したことが考えられる。よって高杯形土器の形態等から岡山県の仁呂式併行と考えられ中期末に位置づけられた吹越2号土壙の土器群の壺形土器は胴部最大径が胴部中位にあり、頭部に貼付け突帯を付すなどの点で、中期末でもやや古い様相を残すものと考えられる。壺形土器では、壺形土器同様胴部最大径が上位にあり全体的にスマートな形態を呈し、口縁端部の拡張は概して小さく、外表の回線文は明瞭に施す。内面のヘラケズリは頭部下半まで、上半はハケ目をのこすものと、指頭圧痕をのこすものがある。高杯形土器では、杯部に明瞭な屈曲部をもつものと、ゆるやかに内湾するものが存在する。前者では杯部上半は直立し、端部の拡張はほとんど認められない。後者では杯部の深い古い様相を残すもののが存在する。脚柱部は文様がヘラ描き沈線によって施されることを特徴とする。鉢形土器では、類例は少ないが溝下遺跡で中期後半とされたやや古い様相を示す鉢形土器が存在する。

I 期（後期前半）

岡山県南部・高梁川以西の白江I式を介して上東、鬼川市I式⁽³⁴⁾と併行関係を考えた後期初頭を含む前半の土器群である。壺形土器では、肩の張りがさらに強くなり長胴のスマートな器形を呈し、徐々に頭部が伸びてくる。そのやや長頸化した頭部外面には回線文状の太い沈線や「ノ」の字状刺突文が施され、口縁端部の拡張も概して0期のものに比べて上方へ伸びてくる。胴部外面に「ノ」の字状刺突文を施すものなどは古い様相を残すものといえ、内面ヘラケズリは胴部上半に及ぶものと、最大径付近までのものとが存在する。また、この時期には、同時期の鉢形土器から派生してくると思われる頭部が算盤玉状に屈曲する壺形土器が出現する。壺形土器も、全体的の器形に大きな変化はないが、口縁端部の拡張がやや直立ぎみとなり、外表の回線文は徐々に退化して不明瞭となる。内面ヘラケズリは、壺形土器同様胴部上半に及ぶものと最大径付近にとどまるものとが存在する。頭部外面に「ノ」の字状刺突文が施されるものはこの時期以降はみられなくなる。頭部上半外面に平行タキ目の痕跡をのこすものが多いのもこの時期の特徴である。高杯形土器では、この時期に杯部に屈曲をもつものに統一される。杯部上半はやや外反ぎみとなり外表に退化した回線文をめぐらせるものや、拡張された端面に回線文をめぐらすものとが存在する。概して器壁が厚く粗雑なつくりとなる。脚柱部の施文がヘラ描文から櫛描文へ移行するものとの時期の特徴である。鉢形土器では、口縁端部の拡張が上方へやや強くなり、頭部が鋭く屈曲して算盤玉状を呈する備後南部に特徴的な鉢形土器が登場するとともに、高杯形土器の杯部が深さを増して鉢形土器となつたものが存在する。相対的に大型化の傾

向が認められ、器種構成の面からも鉢形土器の割合が増加する時期である。この時期の鉢形土器の内面調整に高杯形土器同様のヘラミガキが多いのも特徴の一つであろう。

Ⅱ 期（後期中頃）

この時期の土器は、壺形土器・甕形土器・鉢形土器とも、口縁端部の拡張の直立化と伸長を高杯形土器では、杯部上半の外反を指標とし、前後関係から岡山県南部の上東・鬼川市Ⅰ式とほぼ併行するものと考えた土器群である。しかし、土器の形態的特徴は上東・鬼川市Ⅱ式とはかなり異なり、特に鉢形土器等にみられる備後南部独特の器形は、従来莫然と考えられてきた神谷川式⁽¹⁾の特徴を最もよく示したもので、かって指摘された後期土器の備後南部の独自性が頂点に達した時期と考えられる。これらの特徴を概略すれば、壺形土器では、Ⅰ期に比べて口縁端部が直立して上方にやや大きく拡張し、外表の不明瞭な凹線文は徐々に失われて無文化の傾向を示す。頭部の形態はほとんど変化はないが、外面に「ノ」の字や綾杉状の刺突文を施すものが多い。胴部は、最大径がやや下がってナデ肩を呈するものが多くなるようである。内面ヘラケズリは頭部直下まで及ぶようになり、外面の横方向のヘラミガキが特徴的である。甕形土器も、形態的には壺形土器と同様の変化をたどる。すなわち、口縁端部の直立化と伸長、胴部最大径がやや下がって球形に近い胴部をもつようになるなどである。直立した口縁端部外表には明瞭な凹線文が施されるものも残るが、多くは不明瞭ないしは無文化している。また底部も徐々に矮小化し、小さな平底となる。内面ヘラケズリは、ほとんど胴部上半まで及び、頭部直下まで及ぶものも多くなる。調整その他には大きな変化は認められないが、強いてあげれば、頭部内面の湾曲が、Ⅰ期のものに比べて滑らかになっている。高杯形土器では、口縁端部が拡張せず杯部上半が外反するものに変化している。古い様相を残すものでは、杯部上半内面にⅠ期以来の凹線文の痕跡を残し、杯部の屈曲もⅠ期の伝統をのこしているが、徐々に杯部上半が伸びて古式土師器に近い形態が完成する。しかし、脚端部の形態はⅠ期とほとんど変化が認められない。鉢形土器は、口縁端部の直立化と伸長をもって特徴づけられ、Ⅰ期から確実に発展過程をたどれる胴部に屈曲をもち明瞭な頭部をもつものに加えて、無頭で直立する口縁部をもつものなど新しい形態が登場する。器種構成の中で鉢形土器の占める割合はⅠ期にも増して大きくなる。また、特に大型のものがみられるのもこの時期の特徴であろう。調整手法等は、内面胴部下半をヘラケズリするものが増えるが、無頭で直立する口縁部をもつものは、外面をヘラケズリするものが多い。口縁部外表の凹線文は極めて退化したものが多く、ほとんど無文化に近いものも存在する。器台形土器が1例存在するが、小型のものである。

Ⅲ 期（後期後半）

この時期の土器は、壺形土器の口縁端部の拡張がさらに伸びること、岡山方面からの大型壺の搬入、鉢形土器の胴部の変形等を指標とし、岡山県南部の上東・鬼川市Ⅱ式～才の町Ⅰ式とほぼ併行するものと考えた土器群である。また、この時期の土器群は、Ⅰ期で考えられた備後南部の土器形態の独自性が失われて、岡山方面から搬入されたと思われる大型壺が端的に示す

ように、大きく中部瀬戸内地域の土器様式圏の中に組み込まれていくようである。このことは、備後南部のこの時期の土器に少なからず、岡山方面からの搬入品と考えられる土器がみられることからも、この時期を特徴づける事象であろう。これらⅢ期とした土器群の特徴を概略すれば、壺形土器では、搬入品と思われるものを除いて、口縁端部の拡張がⅡ期に比べてさらに大きくなり、胴部は球形に近くなる。口縁端部以外表の凹線文の退化は著しく、わずかに凹線文状の凹凸があげられる程度になるが、例外的に凹線文を密にめぐらすものも存在する。頭部には綾杉文等の装飾を施すものが多い。明らかに搬入品と考えられる丹塗の大型壺があるが、これは胴部の形態によってはいわゆる特殊壺となる可能性のあるものである。口縁部と頭部の肩曲などからほぼ上東・鬼川市式に比定され得るものと思われる。他に、直立する頭部に短く聞く単純口縁の壺形土器があるが、これは胴部内面がヘラケズリではなく指頭圧痕をのこす無調整となっているなどの点で特異な土器であるが、形態的には岡山県北部の谷尻遺跡や南部の百間川遺跡群等で同様のものが出土しており、香川県原遺跡でも古くから後期後半に位置づけられた土器群の中に同形態のものが含まれており、数量的には少ないがこの時期に中部瀬戸内地域に広範に分布するものとも考えられる。壺形土器では、Ⅱ期に比べて大きな変化はないが、口縁端部外表面の無文化と底部の矮小化が一層すすむ。矮小化した底部の多くは凸シング状に外に張り出す。また内底面には、底部成形の接法等と関わるものが指頭圧痕をのこすものがみられるのもこの時期からである。高杯形土器は例数が少ないが、Ⅰ期のものに比べて杯部上半が発達するものがこの時期に含まれよう。胎土的には精製粘土を用いておらず、伝統的な砂粒を多く含む粘土を用いている。鉢形土器では、Ⅱ期からの発展が考えられる口縁端部が直立して拡張するのに加えて、端部の拡張がわずかで胴部の張りが弱いものが登場する。また、無頭で単純口縁のものや、口縁部が短く聞く単純口縁のものなどもこの時期に含まれるものと考えられる。これらの特徴としては、口縁端部外表面の凹線文が著しく退化し、無文のものがほとんどで、内面ヘラケズリのものでは頭部まで達する。

以上、昨年度調査分を含めた石錐権現遺跡群C地点の集落変遷の在り方、土器編年等を考え、てみたが、他遺跡との比較等の視点に欠け、芦田川流域の遺跡群の中での位置づけなどは今後にその検討課題を残すこととなった。特に、山上に群集する貯蔵穴群の成立と廃絶にかかる集落内の状況については、県内に比較すべき遺跡がなく、今後その評価が問題となろう。また集落立地の点においても、同時期の集落で低地に立地するものも隣接する神辺平野には多く、これらとの相違をどのように解釈するか、さらに検討を要する。

- 註（1）
a. 財団法人広島県埋蔵文化財センター『石錐権現遺跡発掘調査報告』1981年。
b. 広島県教育委員会『石錐権現古墳群発掘調査報告第一第6・7・8号古墳』1981年。
c. 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告』1982年。
d. 広島県教育委員会『石錐権現古墳群発掘調査報告（第9・10号古墳）』1982年。
e. 広島県立埋蔵文化財センター『石錐権現第2号古墳発掘調査報告』1984年。

- (2) 註(1)のeと同じ。
- (3) 註(1)のa参照
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『石錐形現遺跡群・西ヶ崎遺跡発掘調査報告』1985年。
- (5) 註(4)と同じ
- (6) E・F地点の試掘成果については、広島県教育委員会青山透氏の御教示による。
- (7) 『月刊・考古学ジャーナル』No. 225, ニュー・サイエンス社 1983年。
- (8) 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』一A・B・E・H地区一』1978年。
- (9) 岡山県教育委員会『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』1982年。
- (10) " "『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』1963年。
- (11) 津山市教育委員会『大田十二社遺跡』1981年。
- (12) " "『沼E遺跡』1981年。
- (13) " "『東賀坊遺跡B地区発掘調査報告』1981年。
- (14) 高倉洋彰「弥生時代の墓群組成」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編 1975年。
- (15) 備後南部地方では、すでに中期後半頃から方形プランを指向する住居跡がある。これらは、大型のものは少なく丘陵斜面に構築された小型のものが多い。福山市駅家町手坊谷遺跡群・池ノ内遺跡群・地蔵堂遺跡群等で検出している。広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財調査報告』1976年。
- (16) 潟見浩「山陽地方I」「弥生式土器集成」本編1 日本考古学協会 1966年。
- (17) a. 広島県教育委員会『堂塙内遺跡発掘調査報告』1977年。
b. 広島県立府中高等学校生徒会地歴部『芦品郡新市町神谷川遺跡の資料』『地歴部誌』第4号 1976年。
- (18) 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財調査報告』1976年。
- (19) 註(1)cと同じ
- (20) 註(1)aと同じ
- (21) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『石錐山古墳群』1981年。
- (22) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『溝下遺跡発掘調査報告』1983年。
- (23) " "『松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』1984年。
- (24) 岡山県小田郡矢掛町教育委員会『岡山県矢掛町白江遺跡』1966年。
- (25) 岡山県教育委員会『川入・上東』1977年。
- 藤田憲司「山陰「錐尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64巻4号1979年現在、岡山県南部の後期～古式土器の編年研究は、百間川遺跡群の調査を通してさらに詳細に進行しつつあるが、広島県東部の同時期の編年研究は、これらと詳細な併行関係を論及するまでには至っていないのが現状である。よって、ここでは上記2論文に示された編年の大枠が大過ないものと考えて、これに準拠した。
- (26) 註(17)bと同じ
- (27) 間壁忠彦「弥生文化各説（山陽・四国）」『新版考古学講座』4 1979年。
- (28) 備後国分寺下層出土の高杯、広島県教育委員会『備後国分寺跡第4次発掘調査概報』1976年。(第10図16)
御領遺跡F V第2区S B 1出土の台付小壺形土器、神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告』1981年。(第6図20)
- (29) 岡山県教育委員会『中国縦貫自動車建設に伴う発掘調査・6』1976年。
谷尻遺跡No.176土壙出土壺形土器(第31図94)
- (30) 岡山県教育委員会『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』1982年。
大地調査区包含層出土壺形土器(第447図1901)
- (31) 六車恵一「香川県牟礼原遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料篇1 日本考古学協会 1955年。
- (32) 内底部の指頭圧痕を底部外型づくりの根拠とみる意見があり、その発生を吉備地方に求める説がある。井上和人「布留式土器の再検討」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年。



a. 調査前近景（南東より）



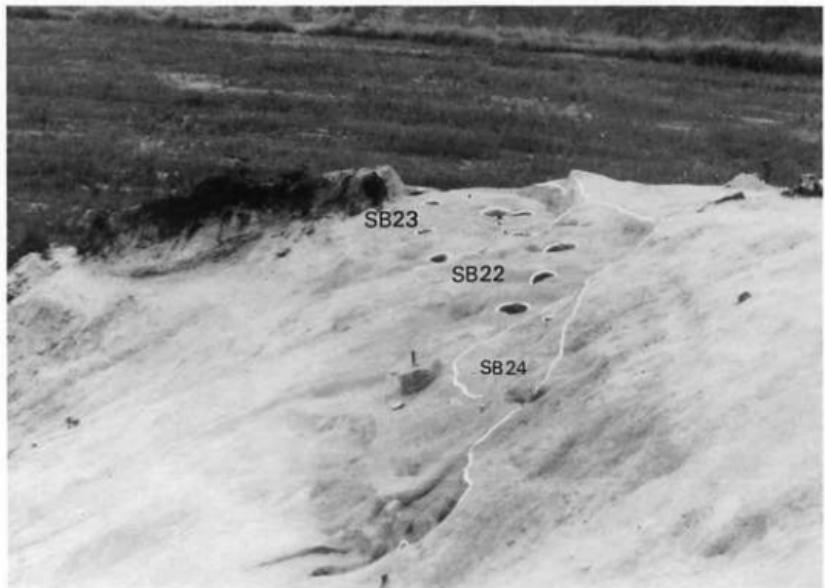
b. 完掘後遠景（東より）



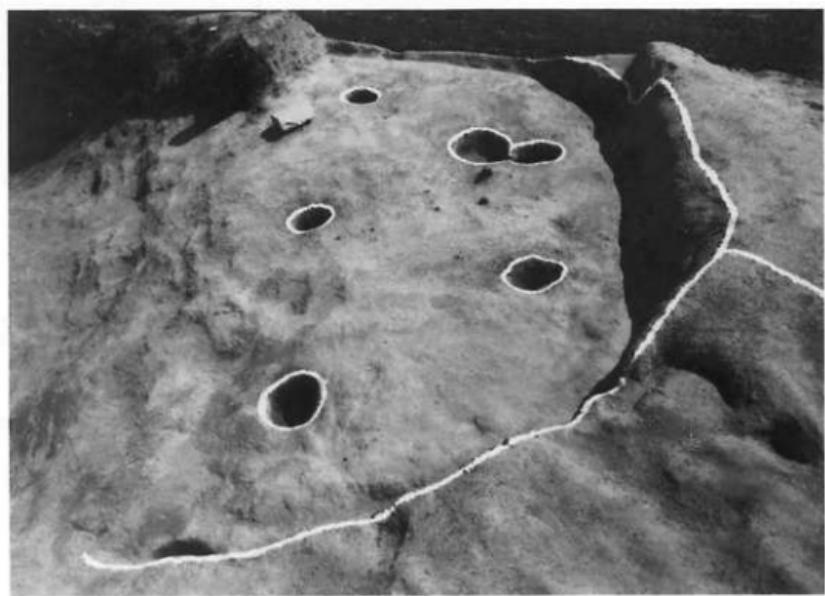
a. 完掘後全景(南東より)



b. 完掘後全景(北より)



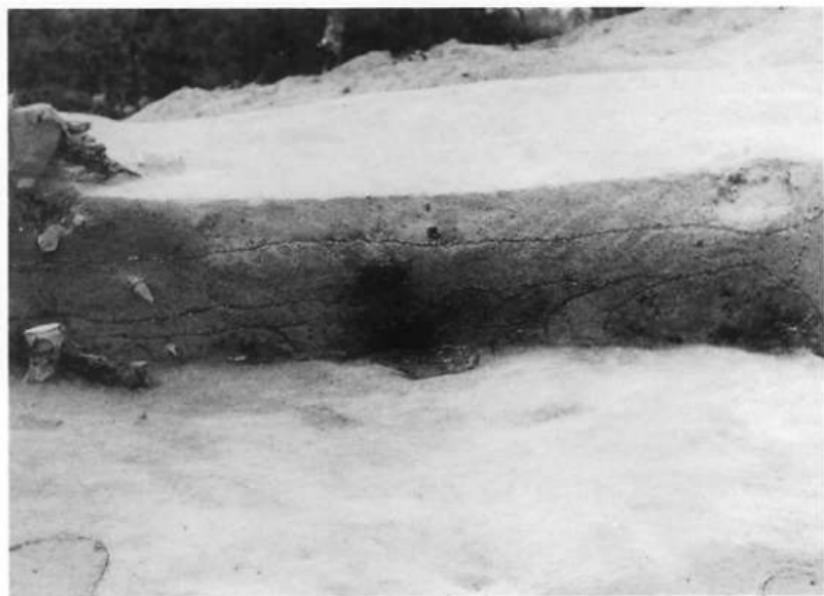
a. 22号建物跡, 23・24号住居跡 (SB 22~24) (北より)



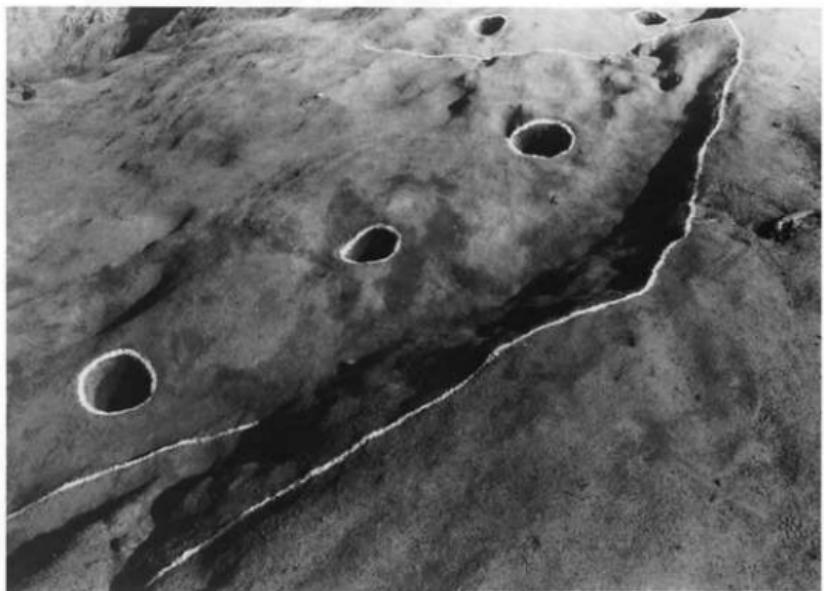
b. 23号住居跡 (SB 23) (北より)



a. 23号住居跡 (SB 23) 内鉄鏃出土状態 (東より)



b. 23号住居跡 (SB 23) 内南北土層断面 (東より)



a. 22号建物跡 (SB 22) (北より)



b. 22号建物跡 (SB 22) 土器出土状態 (南より)



a. 25号住居跡 (SB 25) (南東より)



b. 25号住居跡 (SB 25) 上層土器群及び床面の台石 (南東より)



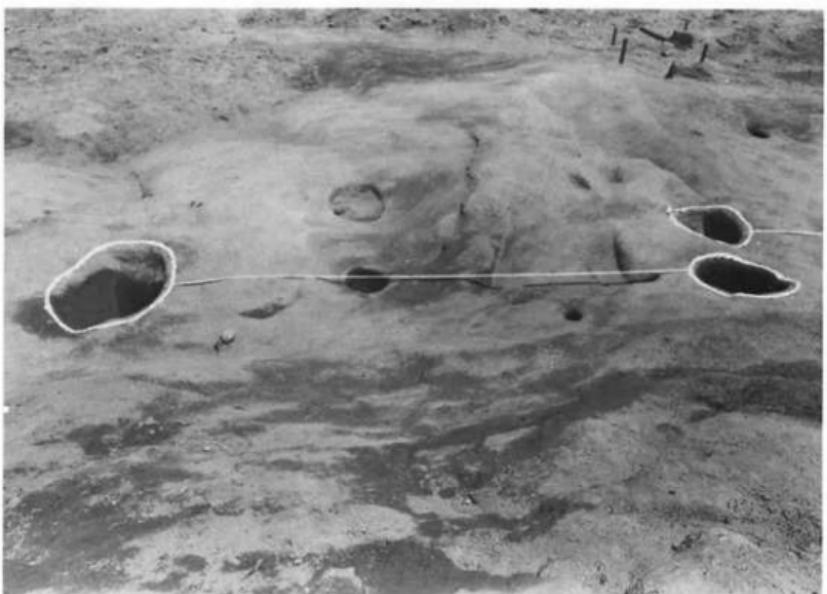
a. 27 a～e号建物跡, 28・32号住居跡 (SB 27 a～e・28・32),
29・33号土壤 (SK 29・33) (南東より)



b. 27 a・b号建物跡 (SB 27 a・b) (北より)



a. 27 a号建物跡 (SB 27 a) (西より)



b. 27 b号建物跡 (SB 27 b) (西より)



a. 28号住居跡 (SB 28) (北より)



b. 28号住居跡 (SB 28) 東面土層断面 (南より)



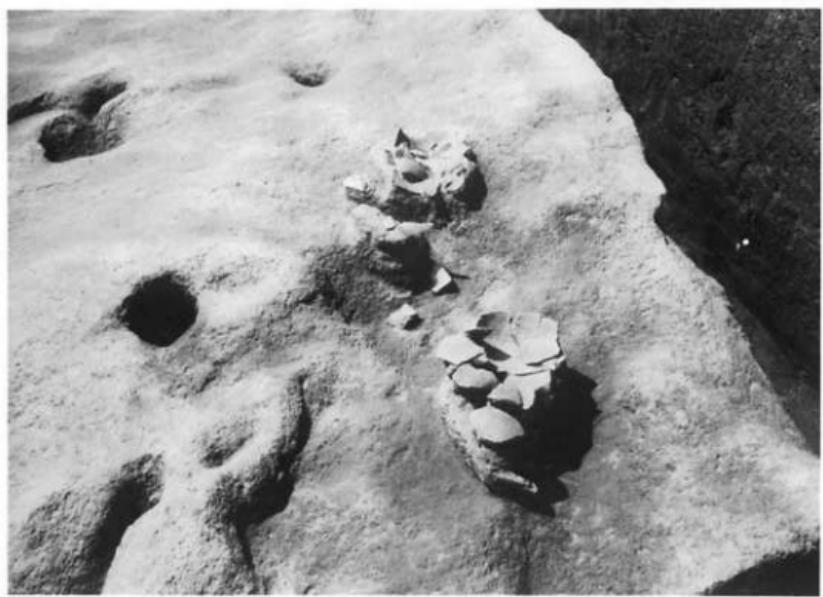
a. 32号住居跡 (SB32) ピット7 (P7) 内遺物出土状態 (南より)



b. 36号土壤 (SK36) 遺物出土状態 (東より)



a. 38号土器溜 (SX38) (東より)



b. 37号土器溜 (SX37) (東より)



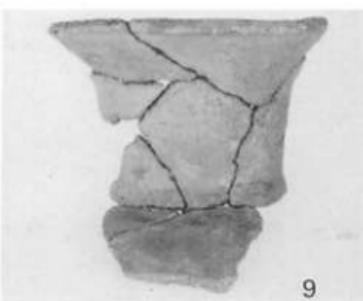
a. 30号不明遺構(SX 30)遺物出土状態(東より)



b. 34号石組遺構(SX 34)(東より)



1



9



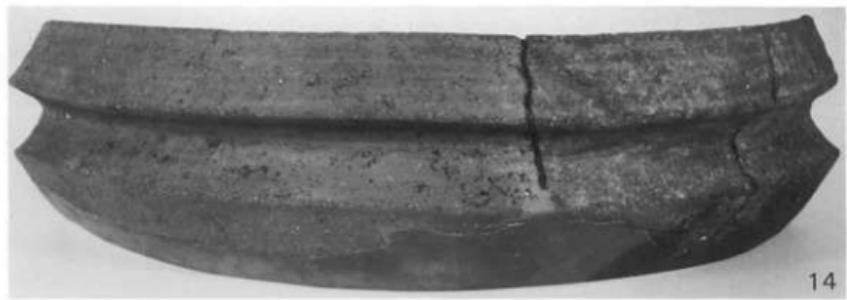
3



11



12



14

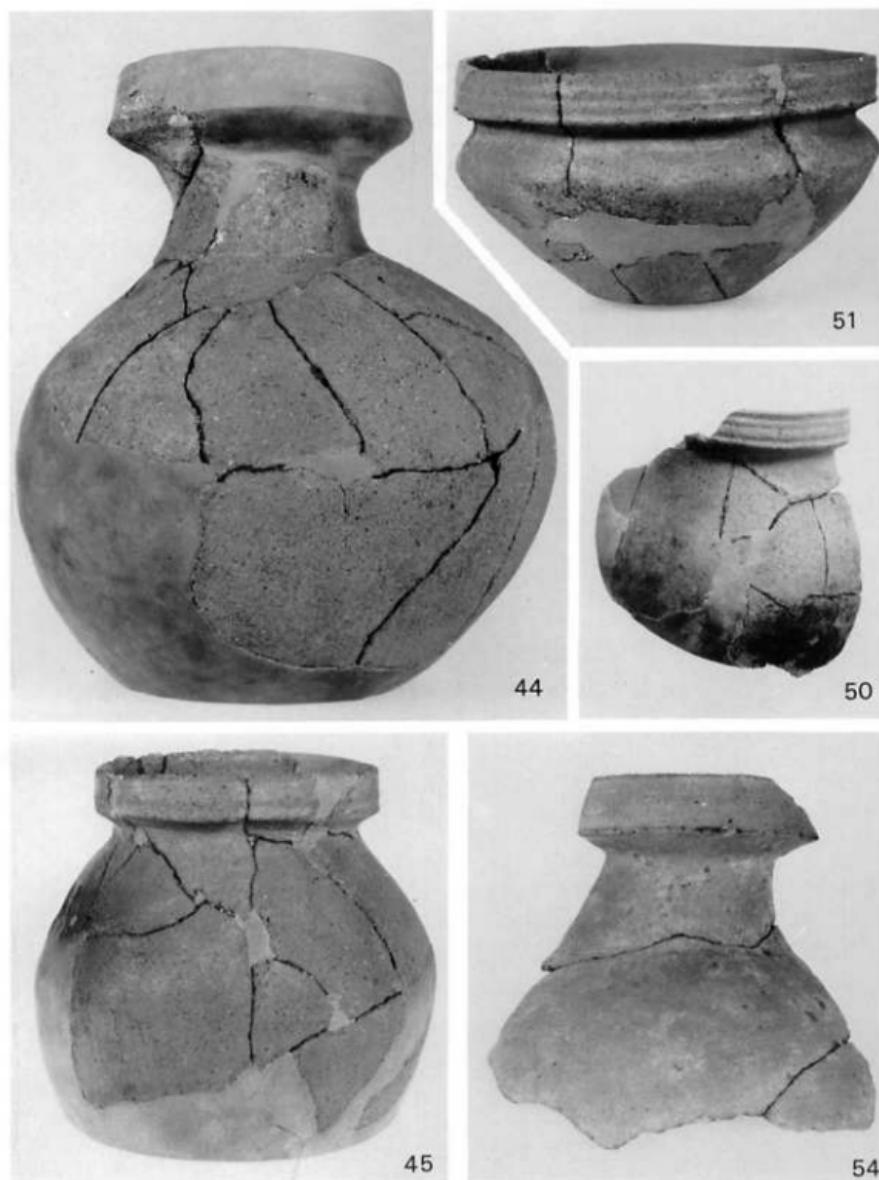
出土土器(1)



出土土器(2)

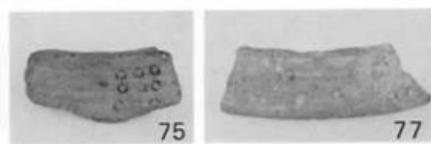
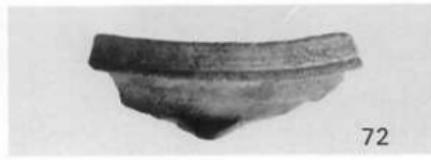
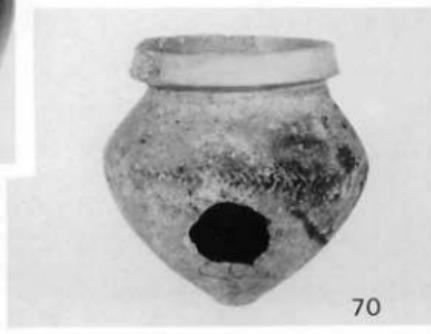


出土土器(3)



出土土器(4)

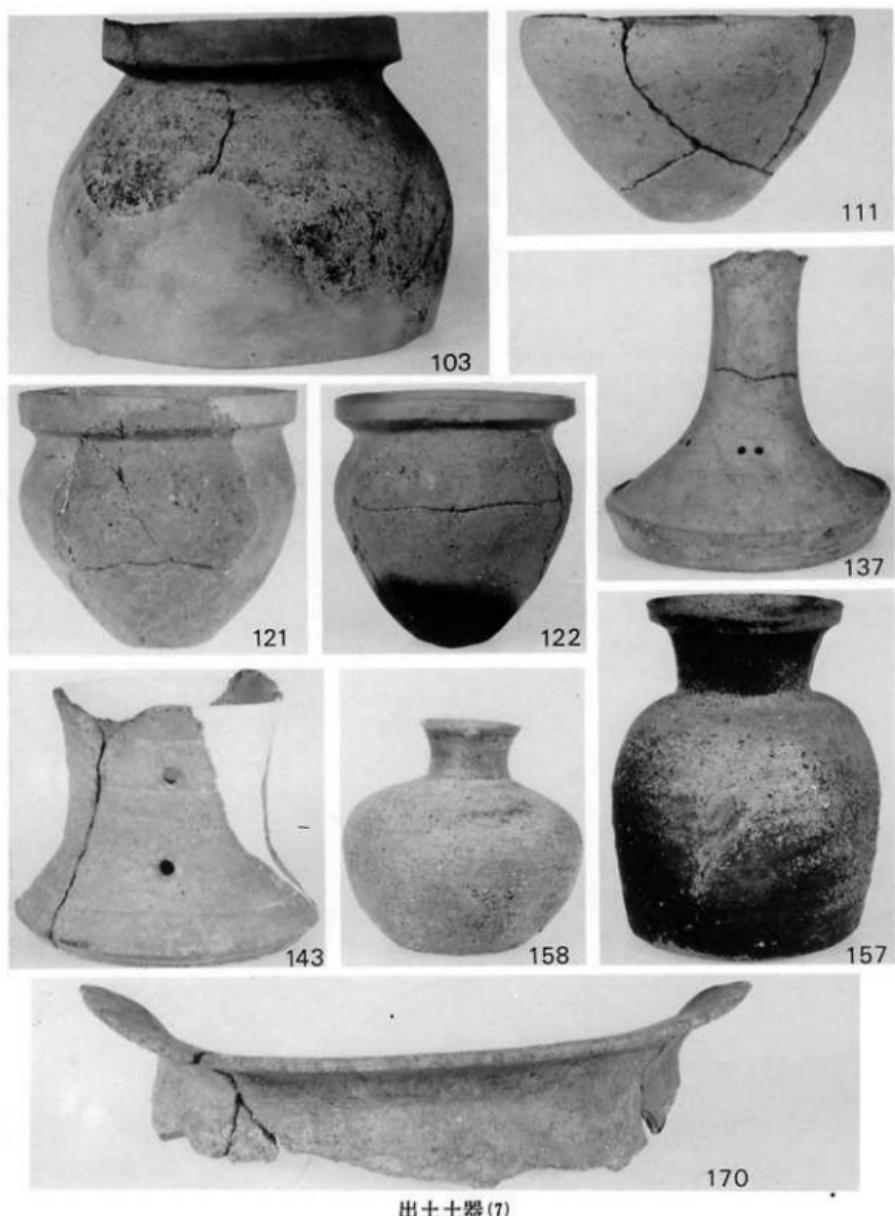
図版 17



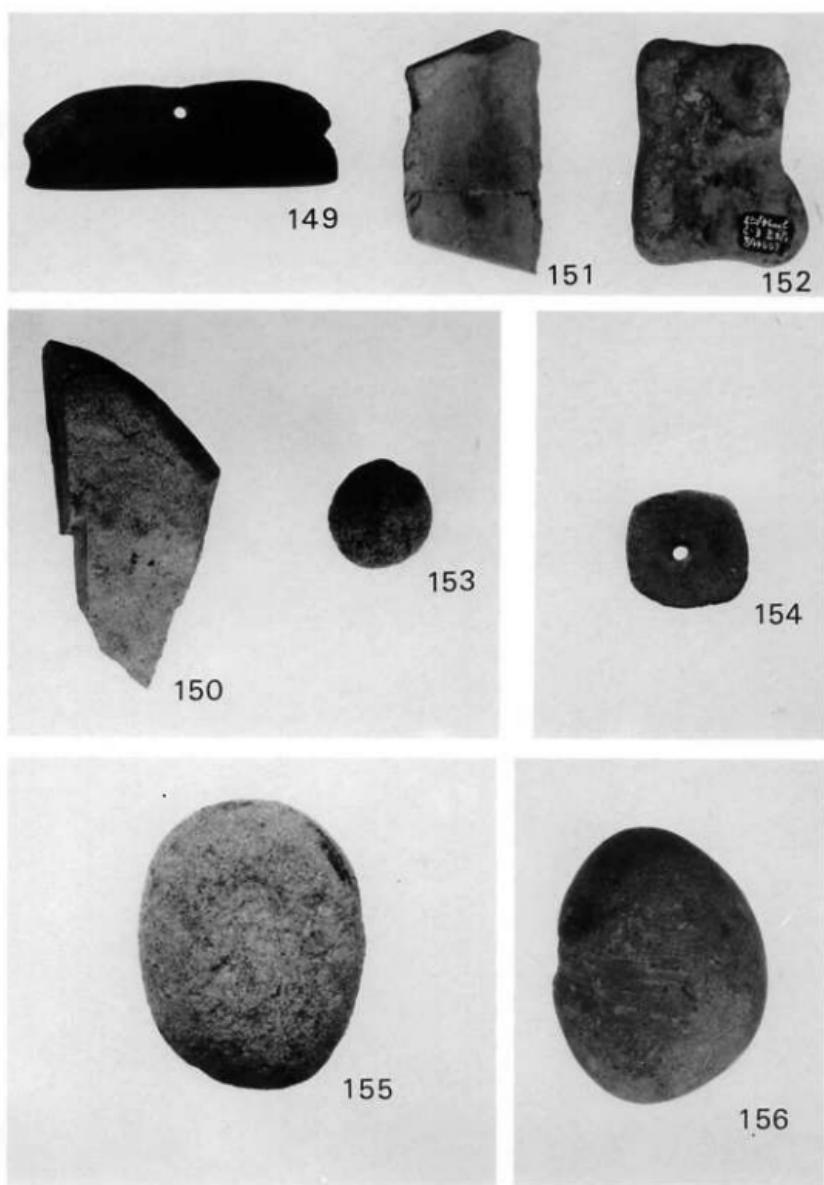
出土土器(5)



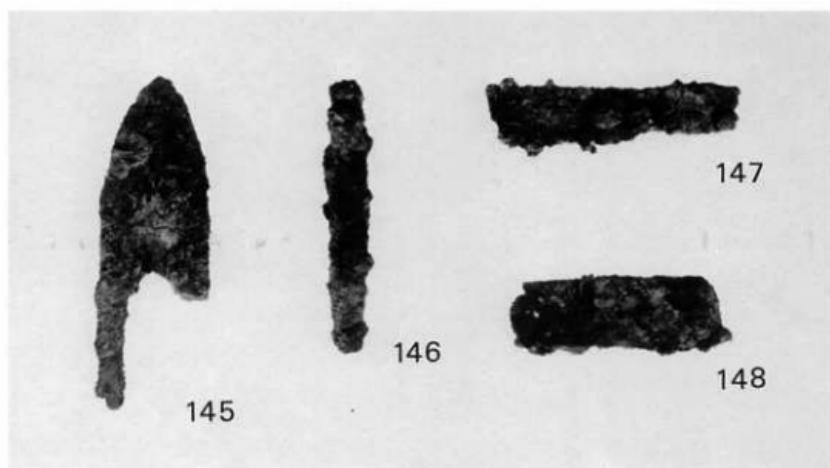
出土土器(6)



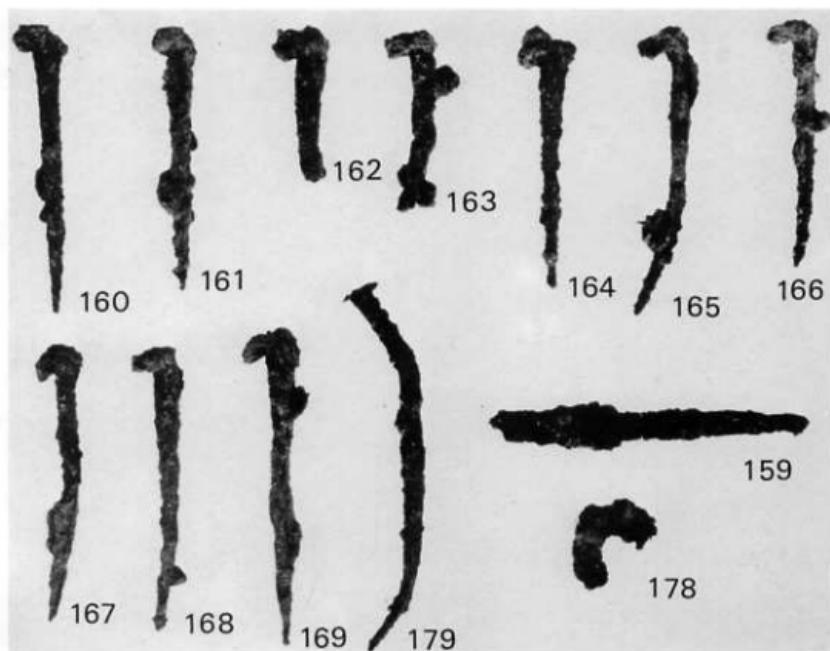
出土土器(7)



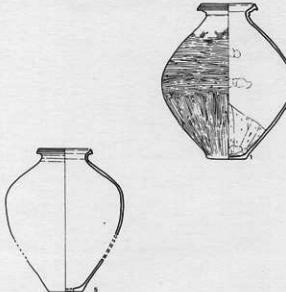
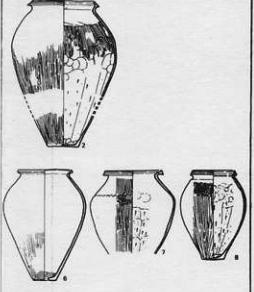
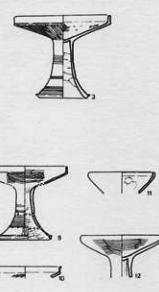
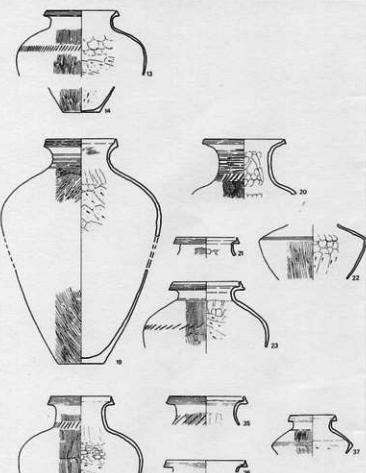
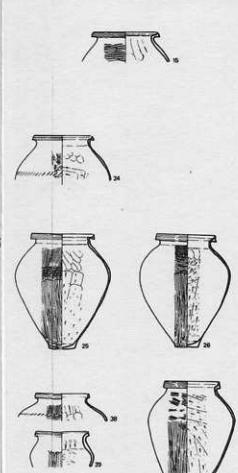
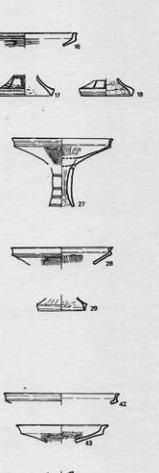
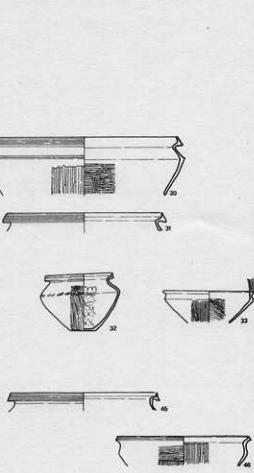
出土石器・土製品



a. 出土弥生時代鉄器



b. 出土平安時代以降の鉄器

時期	器種 遺跡 遺構	壺形土器	甕形土器	高杯形土器	鉢形土器 他
O	吹越遺跡 2号土壤(1~3) 溝下遺跡 P-9(4)				
I	池ノ内遺跡群 3号住居跡(5, 6) 石鋪施遺跡群 A地点4号住居跡(8, 9) 長迫遺跡 1号住居跡(10, 12) C-4区土器群1(7, 11)				
	32号住居跡 P-7(47~50)				

	<p>15号土壤中層(34, 39, 40, 42, 46) 22号建物跡(35, 38, 41, 43, 44) 27-b号建物跡(36, 45) 包含層(37)</p>			
II	32号住居跡 P-7(47~50)			
	25号住居跡上層土器群 (51, 52, 54, 59) 23号住居跡(56, 57) 包含層(53, 58)			
	龜山遺跡 S-B-3001(65~69) 16号住居跡(62, 70, 73) C-2区土器群1(61, 63, 64, 71, 74) C-3区土器群1(60, 72)			
III	36号土壤(75~82)			
	33号土壤(84, 89) 37号土器群(86, 87, 90, 91, 93) 38号土器群(83, 85, 92)			
	25号住居跡(94)			
III	3号住居跡(95, 96, 99, 100, 102~104) C-3区土器群2(97, 98) 包含層(101)			
	C-4区土器群2(107, 109), C-1区黑色土層(105, 106, 110~112) 包含層(108)			

付図 石鎚権現遺跡群C地点・周辺遺跡出土土器編年図(約1:9)

石鎚權現遺跡群発掘調査報告
—C 地点—

—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1985

昭和60年3月30日 発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター
広島市西区緑音新町4-8-49
電話 082 295-5451

発行 広島県教育委員会

印刷  ニシキプリント
広島市西区南工センター7丁目5-33